技術の日立
HITACHI
「何かと何かが出会う所」「接触面」
という意味の言葉、Interface。「マ
ン・マシン・インターフェイス」というよ
うに使われます。人と機械が交わる
所、つまり入出力装置や端末装置
のことです。しかし、日立はInterface
をもっと大きな意味でとらえたいと考
えています。近年、高度に進歩した
機械の多くは専門家のものでした。
操作に知識や熟練を要するからで
す。人間が機械に合わせていたとい
ってもいいでしょう。でも、これからは
機械の方が人間の側に歩み寄る
番です。実現には、きわめて高度な
技術の数かずが必要。しかし、そん
な技術こそが人間と機械の新しい
関係をつくり上げるカギ、すなわち
Interfaceであると考える日立は、
あえてこの課題に挑戦してゆきます。
Interface

第8回日本リーグ戦績

湧永（男子）立石、大崎、ジャスコ（女子）全勝で折り返す

——初日決戦、湧永が制す！

湧永製薬対大同特殊鋼の熱戦

第8回を迎えた日本リーグは、6月10日に前期の幕を明けた。今リーグは、何といっても6月10日の初日・第1戦で、男子の湧永製薬、大同特殊鋼の二強が激突するという点に話題が集まった。とにかく日本リーグが始まって以来過去7回のリーグは、いずれもこの両チームで優勝を争ってきているだけに、この〝初日決戦〟には両チームともかなりの意気込みで乗り込んで来た。

結局、この決戦は、ここ3年間日本リーグでどうしても大同に勝てなかった湧永が、ようやく大同を破り、その余勢をかって前期を全勝で折り返した。

一方女子の方は、やはり立石、大崎、ジャスコの3チームが安定した試合ぶりを見せ、星を落とすことなく前期を終え、一線となって後期の決戦へと持ち込んだ。

男子

＜第1週第1日（6月10日）＞

○東京体育館

湧永製薬 15（8－7、7－7）14 大同特殊鋼

得	【大同】		【湧永】	得
0	上村	GK	大城	0
0	柳川清	GK	井藤	0
0	田中	FP	池ノ上	4
2	田口	FP	生駒	4
1	小野	FP	穂積	0
0	柳川実	FP	藤本	0
1	大原	FP	志賀	0
3	中本	FP	中川	0
0	河井	FP	内田	0
5	蒲生	FP	松本	3
0	市川	FP	山本	3
2	高村	FP	原田	1
14	(3)	PT	(2)	15

（審・斉藤、千野）

開幕第1戦にいきなり〝二強〟の対決とあって両チーム共堅さが目立った一戦であった。前半は湧永の1点リードで終了したが、湧永は14分から24分までの10分間無得点。大同は後半の立ち上がりに逆転、終始リードしたが16分過ぎからやはり11分間無得点の間に湧永の再逆転を許し、終了間際に追い上げたが及ばなかった。

＜第1週第2日（6月11日）＞

○岩井市民体育館（茨城）

大同特殊鋼 31（14－12、17－4）16 三陽商会

得	【三陽】		【大同】	得
0	大山	GK	上村	0
0	田村	GK	柳川清	0
4	関	FP	田中	1
1	金子	FP	田口	3
0	田口	FP	小野	2
0	坪子	FP	柳川実	5
6	砂川	FP	大原	2
3	山口	FP	中本	1
1	石原	FP	蒲生	9
0	望月	FP	海江田	1
0	鵜沢	FP	市川	1
1	亀井	FP	高村	6
16	(3)	PT	(8)	31

（審・岡本、清水）

○…前半は三陽が2点差でくい下がり、動きの良さを感じた。後半に入ると一転して大同のペースとなり、大同が楽勝した。この試合では、蒲生のペナルティ得点5を含む9得点と新人・高村の打点の高さが目立った。

○浦和市民体育館（埼玉）

本田技研鈴鹿 21（11－7、10－12）19 大崎電気

得	【本田】		【大崎】	得
0	大畑	GK	岡部	0
0	中尾	GK	矢内	0
1	佐々木	FP	斉藤	2
2	三本松	FP	東江	2
1	喜井	FP	武田	0
1	豊岡	FP	長野	3
0	長野	FP	櫛田	0
3	玉井	FP	松岡	3
0	栗屋	FP	越迫	0
4	坂本	FP	山本	6
2	尾上	FP	星野	0
7	田野	FP	大沢	3
21	(0)	PT	(2)	19

（審・佐分、大塚）

○…開始早々、大崎は大沢がシ

ュートを決め幸先良い1点を先取したが、その後はしばらく双方もみ合い。

4分経過で本田・田野が1点あげたのを皮切りに、佐々木、玉井、田野、三本松と本田は着々と点を重ね、14分経過で田野が3本目のシュートを決めた時本田は6点となり充実した試合展開。

大崎もがんばるがシュートが決まらない、24分あたりから本田はたちまちのうちに田野、玉井、坂本と3点を加えて11点としたのに対し、大崎は長野、松岡、山本と懸命に追い上げたが及ばず、11対7で前半を終了。

後半開始2分、3分と本田・田野がたて続けにシュートを決め絶対優勢かと思わせたが、大崎の追い上げもものすごく、負けじと山本がシュートを2本決める。その後しばらくはカットのやりあいで双方コート一杯に力のぶつけ合いの熱戦。

7分、大崎・山本がPTを決め、9分長野が素晴しいシュートを決めた頃は場内騒然。

10分、12分の東江のシュートで遂にタイとなり、その後双方一進一退の攻防。

残り1分になって本田は尾上のシュートで1点リード、さらに豊岡のシュートでとどめを刺し、21対19で粘る大崎をようやくふり切った。

○富岡高校体育館

湧永製薬 24（13—10／11—8）18 日新製鋼

得	【湧永】		【日新】	得
0	大城	GK	西川	0
0	井藤	GK	谷	0
4	池ノ上	FP	泉	1
4	生駒	FP	徳田	1
2	穂積	FP	吉見	2
4	藤本	FP	洞ケ瀬	2
0	志賀	FP	脇若	0
0	内田	FP	日野	0
1	松本	FP	森	1
6	山本	FP	高木	5
3	原田	FP	西山	4
0	檜原	FP	藤井	2
24	(3)	PT	(1)	18

（審・上久保・北井）

○…日新はスタートよく10分まで4対2とリードしてゲームを進めたが、湧永も次第に調子を取り戻し、20分を過ぎて8対8の同点とし、更に3点を加えて11対8として前半を終えた。

後半に入って立ち上がり日新は得点を重ね、10分には12対13と1点差まで追い上げたがここまで。以後は湧永の速攻を混えての攻撃に屈して大きく水をあけられた。

＜第1週第3日（6月12日）＞

○栃木市総合体育館（栃木）

本田技研鈴鹿 20（10—7／10—7）14 三陽商会

○…本田は常にゲームの主導権を握り、三陽も関、金子などの得点によってよく食い下がったが、前半の3点差を詰めることが出来なかった。

本田の攻撃力が三陽を上回り、本田の勝利となった。

得	【本田】		【三陽】	得
0	大畑	GK	大山	0
0	中尾	GK	田村	0
3	佐々木	FP	関	2
4	三本松	FP	金子	2
0	喜井	FP	田口	0
1	豊田	FP	坪子	0
0	長野	FP	砂川	6
4	玉井	FP	山口	2
1	粟屋	FP	石原	2
1	坂本	FP	望月	0
2	尾上	FP	鵜沢	0
4	田野	FP	亀井	0
20	(4)	PT	(3)	14

（審・山下・浜野）

○市川市民体育館（千葉）

日新製鋼 24（13—6／11—8）14 大崎電気

得	【大崎】		【日新】	得
0	岡部	GK	西川	0
0	原田	GK	谷	0
2	斉藤	FP	泉	3
1	東江	FP	徳田	0
1	武田	FP	吉見	3
4	長野	FP	洞ケ瀬	4
1	櫛田	FP	脇若	0
1	松岡	FP	日野	0
0	越迫	FP	森	2
3	山本	FP	高木	0
1	大沢	FP	西山	8
0	八幡	FP	藤井	4
14	(2)	PT	(1)	24

（審・岡本・清水）

○…立ち上がり大崎が4連続得点して好スタートを切ったが、シュートミスをくり返している間に日新がペースをとり戻し、GKの好守で後半はワンサイドゲームとなる。

＜第2週第1日（6月18日）＞

○京都府立体育館（京都）

大崎電気 27（15—11／12—9）20 三陽商会

○…大崎は開始直後から三陽2番にマンツーマンディフェンスをつける。両チーム共守りが固く10分過ぎまで2対2のロースコアの試合。その後ポスト、ロング、速攻と多彩な攻撃を見せる大崎に対し、三陽は金子の切り上がりからのシュート、2本のPTを確実に得点に結びつけ必死に追い上げるが、12対9と大崎リードで前半を終了。

後半開始直後から三陽商会の一方的な攻撃となり、9分遂に15対15の同点に追いつく。しかし、10分から20分までの間三陽のシュートは大崎GKの矢内の固い守りに阻まれて得点出来ず、この間に着実に得点を重ねた大崎は20対15と再びリード。三陽も残り5分近くから追いすがるが、大崎の三陽・関に対するマンツーマンディフェンスは固く、27対20で大崎が勝利を収める。

得	【三陽】		【大崎】	得
0	大山	GK	岡部	0
0	田村	GK	矢内	0
3	関	FP	斉藤	2
2	金子	FP	東江	5
1	田口	FP	武田	0
0	坪子	FP	長野	9
6	砂川	FP	松岡	1
4	山口	FP	越迫	0
2	石原	FP	山本	8
0	望月	FP	宮崎	0
0	鵜沢	FP	星野	0
2	亀井	FP	大沢	2
20	(3)	PT	(5)	27

（審・福井・吉田）

＜第2週第2日（6月19日）＞

○徳山市体育館（山口）

日新製鋼 31（18—15／13—8）23 三陽商会

得	【三陽】		【日新】	得
0	大山	GK	西川	0
0	田村	GK	谷	0
7	関	FP	泉	5
1	金子	FP	徳田	1
3	田口	FP	吉見	7
0	坪子	FP	洞ケ瀬	0
6	砂川	FP	脇若	0
2	山口	FP	日野	0
1	石原	FP	森	2
0	望月	FP	高木	0
3	鵜沢	FP	西山	12
0	亀井	FP	藤井	4
23	(3)	PT	(4)	31

（審・岡村・中村）

○…前半、日新は西山、三陽は関を中心に攻め、15分3対3となったが、その後日新は西山のロング、アシスト等で得点し、差を広げて13対8で前半を終った。後半、三陽は西山を密着マンツーに出たが、日新は他の選手が良く動いて得点し、差を縮めることが出来ず31対23で終った。

○露橋スポーツセンター（愛知）

大同特殊鋼 24（11—4／13—10）14 大崎電気

得	【大同】		【大崎】	得
0	上村	GK	原田	0
0	柳川清	GK	矢内	0
1	田中	FP	斉藤	0
5	田口	FP	東江	1
0	小野	FP	武田	0
4	柳川実	FP	長野	6
6	大原	FP	松岡	1
3	中本	FP	越迫	1
1	河井	FP	山本	3
2	蒲生	FP	宮崎	1
0	市川	FP	星野	1
2	高村	FP	大沢	0
24	(0)	PT	(3)	14

（審・新村・島崎）

○…前半立ち上がり動きの固さが見られる大同は、大崎の早いつぶしに合って前半14分でやっと3

対3に追いつき、25分まで一進一退のゲーム展開となったが、蒲生の速攻からようやく点差が開き、13対10で前半を終了した。
　後半に入って大同は蒲生にマンツーマンを受けてボールの展開がかみ合わなかったが、15分過ぎ柳川の速攻からようやく大同らしさが見え、後半大崎を突き放した。

○今治市立体育館（愛媛）

湧永製薬 19（9−11 10−6）17 本田技研鈴鹿

得	【湧永】		【本田】	得
0	大城	GK	大畑	0
0	井藤	GK	中尾	0
2	池ノ上	FP	佐々木	2
2	生駒	FP	三本松	4
1	穂積	FP	喜井	0
0	藤本	FP	豊岡	0
1	志賀	FP	玉井	1
0	中川	FP	粟屋	1
0	内田	FP	猪野	0
4	松本	FP	坂本	3
7	山本	FP	尾上	3
2	原田	FP	田野	3

（審・野中 竹村）

17 (3) PT (4) 19

○…前半15分まで7対4と本田がリード。
　本田のディフェンスが良く、また、坂本、三本松、尾上の好プレーで11対9と本田リードで前半終了した。
　後半、湧永もじりじりと差を詰め、16分にやっと同点に追いついた。
　そして、湧永は松本のポスト、生駒もロングで逆にリードを奪い、19対17の2点差で逃げ切って勝った。

＜第3週第1日（6月25日）＞

○四日市市体育館

日新製鋼 26（14−4 12−18）22 本田技研鈴鹿

得	【本田】		【日新】	得
0	大畑	GK	西川	0
0	中尾	GK	谷	0
5	佐々木	FP	泉	1
4	三本松	FP	徳田	1
0	喜井	FP	吉見	2
2	豊岡	FP	洞ケ瀬	2
0	玉井	FP	脇若	1
0	粟屋	FP	日野	0
3	猪野	FP	森	4
0	坂本	FP	高木	3
2	尾上	FP	西山	9
6	田野	FP	藤井	3

（審・川島 森）

26 (2) PT (3) 22

○…前半開始早々、日新・西山、本田・田野のロングで始まる。徐々に本田ディフェンスの甘さを日新がつき、ポスト、ロングと多彩な攻撃をしかけ、25分過ぎ9対3と差が開く。その間本田もロング、サイドとシュートをねらうも、日新GK西川の再度の好プレーにはばまれ散発。一方、日新のリズムに乗った攻撃がやまず、西山、森の活躍で10点リードで前半終了。
　後半に入り、本田も気力ある攻撃をしかけ、佐々木、田野などの活躍で18分過ぎには4点差まで縮めるも、日新あせらずに加点、本田の追撃をかわした。前半の大差がものをいった試合であった。

＜第3週第2日（6月26日）＞

○神戸市中央体育館

大同特殊鋼 24（12−5 12−11）16 日新製鋼

得	【大同】		【日新】	得
0	上村	GK	西川	0
0	柳川清	GK	谷	0
0	田中	FP	泉	2
2	田口	FP	徳田	0
4	小野	FP	吉見	3
3	柳川実	FP	洞ケ瀬	2
3	大原	FP	脇若	0
1	中本	FP	日野	0
0	河井	FP	森	3
10	蒲生	FP	高木	4
1	市川	FP	西山	1
0	高村	FP	藤井	1

（審・幸田 新井）

16 (0) PT (3) 24

○…開始早々、日新・西山のミドルシュートで先行するが、両チーム共ラフプレーが目立ち、5分西山負傷、13分日新GK負傷退場など荒いプレーが目立つ。攻撃力は両チーム共に大差がないように思われたが、大同が日新・西山にマンツーマン気味にディフェンスをするなどディフェンスに工夫が見られ、そのディフェンス力の差が勝敗を決めたように思われる。

○宗像市民体育館（福岡）

湧永製薬 21（10−7 11−9）16 三陽商会

得	【湧永】		【三陽】	得
0	大城	GK	大山	0
0	井藤	GK	田村	0
5	池ノ上	FP	関	4
6	生駒	FP	金子	0
0	藤木	FP	田口	0
0	志賀	FP	砂川	8
1	中川	FP	山口	3
2	内田	FP	石原	1
2	松本	FP	望月	0
3	山本	FP	鵜沢	0
2	原田	FP	亀井	0
0	檜原	FP		

（審・大宮 井手）

16 (6) PT (3) 21

○…開始3分、三陽がペナルティで得点、両チーム共動きが鈍くシュートミスやパスミスが続出、12分まで2対2のスコアであった。前半の終盤頃から湧永の動きが良くなり、速攻で加点し前半は10対7と湧永リードで終了。後半に入り両チーム共動きのテンポが早くなり、迫力あるプレーが展開された。三陽も良く追いすがったが、ミドルシュートの甘さが逆速攻につながり、これが最大の敗因といえる。

＜第4週第1日（7月1日）＞

○大阪市立中央体育館

大同特殊鋼 23（13−9 10−8）17 本田技研鈴鹿

得	【本田】		【大同】	得
0	大畑	GK	上村	0
0	中尾	GK	柳川清	0
4	佐々木	FP	田中	0
2	三本松	FP	田口	0
1	豊岡	FP	小野	2
2	玉井	FP	柳川実	4
0	粟屋	FP	大原	2
0	立木	FP	中本	3
0	猪野	FP	河井	1
4	坂本	FP	蒲生	7
1	尾上	FP	市川	2
3	田野	FP	高村	2

（審・島崎 井上）

23 (3) PT (1) 17

○…前半は素晴しいシーソーゲームだったが、残り10分頃から大同のディフェンスがまとまり、着実に得点を重ねていった。
　特に速攻がよく決まり始めた。
　後半、本田の攻撃の足が止まり、大同の変則ディフェンスを破ることができず、そのまま大同のペースで試合が運ばれた。

＜前期最終日（7月2日）＞

○広島県体育館

湧永製薬 21（11−7 10−6）13 大崎電気

得	【湧永】		【大崎】	得
0	大城	GK	原田	0
0	井藤	GK	矢内	0
3	池ノ上	FP	斉藤	3
2	生駒	FP	東江	2
3	穂積	FP	武田	0
0	藤本	FP	長野	5
0	志賀	FP	松岡	0
1	中川	FP	越迫	0
0	内田	FP	山本	2
8	松本	FP	宮崎	0
2	山本	FP	星野	0
2	原田	FP	大澤	1

（審・岡村 中村）

13 (3) PT (0) 21

○…前半立ち上がり大崎・長野の得点で先行したが、湧永は原田の連続得点等で15分まで一進一退であったが、その後湧永・生駒のロング、松本、山本の速攻等でリードし前半を終る。後半に入って湧永は着実に得点を重ね10分で16対8とした。
　大崎も生駒にマンツーマンにつけ、速い動きで対抗したが点差を縮めるに至らなかった。

女子

＜第1週第2日（6月11日）＞

○岩井市民体育館

ジャスコ 12（5−8 7−3）11 日本ビクター

○…前半は武藤の4得点などで日本ビクターが3点をリードして

得	【ジャ】		【日ビ】	得
0	矢部	GK	渡辺	0
0	木村	GK		
0	松岡	FP	志村	2
6	寺沢	FP	中根	0
0	若林	FP	門脇	0
1	石田	FP	武藤	5
3	鷲野	FP	長田	3
0	十丸	FP	遠藤	0
0	三木	FP	染谷	1
1	近藤	FP	村上	0
0	宮本	FP	池田	0
1	野村	FP	須賀	1
12	(2)	PT	(2)	11

（審・後藤・島田）

折り返した。

　ジャスコ寺沢のシュートを再三ビクターGK渡辺が好守したのも目立った。

　後半は15分過ぎジャスコ寺沢が得点し、終了7分前に同点、4分前に野村のサイドからの得点で遂に逆転した。ビクターは終了1分前にPTのチャンスを惜しくもはずして無念の敗戦となった。

○浦和市民体育館（埼玉）

大崎電気 25（12－6、13－8）14 北国銀行

得	【北国】		【大崎】	得
0	辻	GK	梅野	0
0	新宅	GK	大西	0
2	中川	FP	西	6
6	八木	FP	大日	0
0	和田	FP	宮嶋	2
3	中田	FP	石井	5
1	竹	FP	渡部	1
0	山崎	FP	徳渕	7
2	藤田	FP	時實	0
0	丸山	FP	嘉本	1
0	小玉	FP	李相玉	3
0	吉田	FP	李京姫	0
14	(0)	PT	(4)	25

（審・菊池・栗岩）

○…開始30秒で大崎・石井が先制。続いて渡部、西と3連続得点。北国はパスの乱れに苦しみ、10分にようやく藤田が得点、11分過ぎに更に八木が1点を加えたが、応援団の大声援をバックにはりきる大崎は、その後も着々と得点をあげて引き離し13対8で前半を終了した。

　後半開始後しばらく北国もGK辻の好守でよく防いだが、4分過ぎ大崎・西のスカイプレーで1点を加え、更に徳渕の連続得点などで大崎が得点を重ね北国を突き放した。

○富岡高校体育館（群馬）

ブラザー工業 20（11－5、9－9）14 日立栃木

得	【日立】		【ブエ】	得
0	椿谷	GK	畑添	0
0	葛生	GK	大薮	0
2	大高	FP	杏原	4
3	栗原	FP	竹内	6
1	西山	FP	赤井	0
0	土屋	FP	中村	0
0	手打	FP	増永	6
5	前田	FP	太田	1
0	清水	FP	松岡	0
1	吉田	FP	塩屋	0
2	山本	FP	森山	0
0	山岸	FP	松下	3
14	(4)	PT	(4)	20

（審・住尾・広沢）

○…ブラザーがまず2点を連取してスタート、20分を過ぎるまでに8対5とリードしたが、日立も4連続得点、結局9対9で前半を終了。後半に入って日立はブラザーの強いアタックにあってシュートチャンスをつかめずミスが多くなり僅か5得点。これに対してブラザーは2、3、4、6分と得点を重ね一気に優位に立ってゲームを進め、第1戦を飾った。

＜第1週第3日（6月12日）＞

○栃木市総合体育館（栃木）

日立栃木 21（14－8、7－7）15 大和銀行

得	【日立】		【大和】	得
0	椿谷	GK	高浜	0
0	葛生	GK	松本	0
5	大高	FP	鈴木	3
1	栗原	FP	若杉	4
3	西山	FP	前田	0
1	土屋	FP	若水	3
0	手打	FP	馬渡	2
5	前田	FP	天谷	0
0	清水	FP	高橋	0
1	吉田	FP	西野	0
3	山本	FP	秋成	2
2	山岸	FP	川添	1
21	(5)	PT	(3)	15

（審・平井・佐野）

○…大きな声援を受けての日立が後半に奮起して地元での勝利をものにした。日立の大高、前田の健闘が勝利をもたらした。敗れた大和の若水の元気なプレーぶりも目を引いた。

○市川市民体育館（千葉）

大崎電気 29（17－11、12－7）18 日本ビクター

得	【日ビ】		【大崎】	得
0	渡辺	GK	梅野	0
2		GK	大西	0
3	志村	FP	西	5
1	中根	FP	宮嶋	4
0	門脇	FP	石井	4
5	武藤	FP	渡辺	0
1	長田	FP	徳渕	0
0	遠藤	FP	時實	3
0	染谷	FP	李相玉	10
2	村上	FP	李京姫	1
2	下條	FP	松尾	2
2	須賀	FP	深沢	0
18	(3)	PT	(7)	29

（審・内田・高野）

○…前半は好ゲームを展開したが、大崎のGKを中心としたディフェンスが良く次第に差を広げ、日本ビクターは動きがリズムに乗り切れずに終った。

＜第2週第1日（6月18日）＞

○京都府立体育館（京都）

立石電機 19（8－8、11－8）16 大和銀行

得	【大和】		【立石】	得
0	高浜	GK	井村	0
0	松本	GK	荒木	0
2	鈴木	FP	是枝	2
3	若杉	FP	亀園	1
0	前田	FP	イレシュ	1
1	若水	FP	薮田	7
3	馬渡	FP	喜久山	0
0	天谷	FP	岩村	2
2	高橋	FP	近藤	0
0	西野	FP	山口	0
3	秋成	FP	野嶋	5
2	川添	FP	山内	1
16	(4)	PT	(3)	19

（審・丸岡・島崎）

○…立ち上がり立石イレシュからの好パスを野嶋が先制得点、中盤まで両チームGKの好守が相つぎ接戦となる。中盤大和が奮起して同点に追いつき、更に立石のパスミスを速攻につなぎ逆に1点のリードをし会場を湧かせたが、17分立石・薮田がPTを落ち着いて決め11対8で前半終了。

　後半開始直後から7分過ぎまで立石の一方的な攻撃が続き14対8と差を開く。が、10分過ぎから大和が反撃を開始し2点差まで詰め寄るが、13分立石・野嶋のロングが決まる。その後一進一退の好ゲームを展開したが、結局19対16で立石が勝利を握る。

＜第2週第2日（6月19日）＞

○徳山市体育館（山口）

日本ビクター 16（11－9、5－7）16 日立栃木

得	【日立】		【日ビ】	得
0	椿谷	GK	渡辺	0
0	葛生	GK		
3	大高	FP	志村	5
2	栗原	FP	中根	1
1	西山	FP	門脇	0
1	土屋	FP	武藤	4
0	手打	FP	長田	2
8	前田	FP	遠藤	0
0	吉田	FP	染谷	3
0	山本	FP	村上	0
0	藤田	FP	下條	1
1	山岸	FP	須賀	0
16	(4)	PT	(5)	16

（審・東・中本）

○…前半5分、日立は3対0とリードしたがその後得点差を広げることが出来ず、15分まで得点なしと攻めあぐんだ。その後、両チーム共良く動き、前半は7対5と日立リードで終った。後半ビクターはカットイン、ポストでPTを誘い、13分同点に追いつき、その後一進一退の好ゲームとなった。残り1分でビクターは1点リードしていたが、日立はビクターのパスミスを拾って速攻、PTを得て前田がこれを決め、結局16対16の同点で引き分けた。

○露橋スポーツセンター（愛知）

立石電機 21（9－12、12－4）16 ブラザー工業

○…立石はイレシュの動きに合ったプレーで得点を入れ、ブラザーは立石の動きにディフェンスが

得	【立石】		【ブ工】	得
0	井村	GK	畑添	0
0	荒木	GK	大藪	0
3	是枝	FP	杏原	6
3	亀園		竹内	4
0	イレシュ		赤井	0
2	藪田		中村	4
0	喜久山		増永	0
4	岩村	（審・千野 三枝）	太田	1
2	近藤		松岡	0
2	江口		塩谷	1
3	野嶋		森山	0
2	山内		松下	0
21	(2)	PT	(2)	16

つけず、退場者3名を出したのが大差になった。後半は立石はイレシュを出さず、ブラザーは杏原が5得点をあげ追い上げるが、立石GK・井村の好プレーに助けられ2勝目を収めた。

＜第3週第1日（6月25日）＞

○四日市市体育館（三重）

ジャスコ　23（12－5, 11－7）12　日立栃木

得	【日立】		【ジャ】	得
0	椿谷	GK	矢部	0
0	葛生	GK	木村	0
1	大高	FP	松岡	1
0	栗原		寺沢	11
1	西山		今里	0
0	土屋		若林	0
0	手打		石田	0
3	前田	（審・岩永 岩本）	鷲野	4
0	清水		十丸	0
0	吉田		宮木	2
4	山本		野村	1
3	山岸		近藤	4
12	(4)	PT	(6)	23

○…立ち上がり両チーム共固さが残り、スローペースで10分まで互角の展開。13分過ぎに寺沢がペナルティスローを決めたあとジャスコが本来のペースをつかみ、速攻が決まりだして前半をリードした。後半立ち上がり日立も健闘、3点差まで詰め寄ったが、中盤以降ジャスコに一日の長があり、日立に大差をつけた。この試合でジャスコの寺沢がペナルティ4得点を含む11得点と目立った。

＜第3週第2日（6月26日）＞

○神戸中央体育館（兵庫）

大崎電気　27（16－10, 11－9）19　大和銀行

得	【大崎】		【大和】	得
0	梅野	GK	高浜	0
0	藤田	GK	松本	0
8	西	FP	鈴木	2
0	大日		若杉	3
5	宮嶋		前田	0
5	石井		若水	4
0	渡部		馬渡	4
1	徳渕	（審・北山 大原）	天谷	0
2	時實		高橋	2
0	塩谷		西野	1
4	李相玉		秋成	1
2	李京姫		川添	2
27	(9)	PT	(1)	19

○…試合開始後、大和・若水が大崎・李相玉をマンツーマンしたことが功を奏し、前半2ゴール差で終了。後半も15分まで一進一退の好ゲームとなったが、大崎は李相玉の好配球、西、石井の活躍で大和を振り切った。

○宗像市民体育館（福岡）

立石電機　28（15－9, 13－9）18　北国銀行

得	【立石】		【北国】	得
0	井村	GK	辻	0
0	荒木	GK	新宅	0
1	是枝	FP	中川	2
3	亀園		八木	7
4	イレシュ		小玉	0
3	藪田		中田	1
0	岩村		竹	2
6	近藤	（審・福田 松尾）	山崎	0
6	江口		藤田	2
1	山口		丸山	1
4	野嶋		吉田	0
0	山内		大西	3
28	(3)	PT	(1)	18

○…前半の両チームの攻撃は、立石が速攻とカーヤのポストプレー、北国が八木のパスプレーを中心に展開された。立石は北国のミドルシュートをよくカットし、前半4点差で終了する。後半、北国は八木の活躍で追いすがるが、カーヤのポスト攻撃やパスカットからの速攻で、結局10点差で終了する。両チーム共パスミス、シュートミスの多いゲームであった。

＜第4週第1日（7月1日）＞

○大阪市立中央体育館

大和銀行　23（13－12, 10－10）22　日本ビクター

得	【大和】		【日ビ】	得
0	高浜	GK	渡辺	0
0	松本	GK		
3	鈴木	FP	志村	15
1	若杉		中根	1
0	前田		門脇	0
5	若水		武藤	2
3	馬渡		長田	0
0	天谷	（審・北山 浜野）	遠藤	0
2	高橋		染谷	3
0	西野		村上	1
5	秋成		池田	0
4	川添		下條	0
23	(3)	PT	(7)	22

○…開始30秒、大和はパスカットよりチャンスをつかみ、若杉の速攻で先制。一方、日本ビクターも直後に志村のミドルで応酬、以後両チームキーパーの好守もあり前半は10対10の同点で終了した。

後半開始早々、日本ビクターは染谷の速攻で先行し、6分30秒には多彩な攻撃により15対10と得点差を広げ逃げ切るかに見えたが、大和銀行は7分過ぎよりリズムに乗り、16分には秋成のペナルティで同点とし、17分に川添のロングで逆転した。以後一進一退であったが、大和は28分、29分に連続得点をあげ、勝利を確定した。

＜前期最終日（7月2日）＞

○広島県体育館

ブラザー工業　21（9－7, 12－8）15　北国銀行

得	【北国】		【ブ工】	得
0	辻	GK	畑添	0
0	新宅	GK	大藪	0
4	中川	FP	杏原	3
1	八木		竹内	3
2	和田		赤井	0
1	中田		中村	5
4	竹		増永	5
0	山崎	（審・東 中本）	太田	2
2	藤田		松岡	0
1	丸山		松下	3
0	貞吉		近藤	0
0	大西		原田	0
15	(0)	PT	(4)	21

○…前半立ち上がりブラザー・杏原、中村が得点し、10分で5対2とブラザーがリードしたが、その後北国はよく食い下がり、12対8とブラザーのリードで前半を終える。後半に入り、北国・中田、竹と連続得点で2点差まで追いついたが、ブラザーは10分より4連続得点で北国を突き放した。

二部前期リーグ

＜男子＞中村荷役が全勝
＜女子＞東京重機が先勝

＜男子＞

▽6月11日（ジャスコ体育館）

トヨタ車体 25（13－13、12－10）23 大阪ガス
中村荷役 28（12－7、16－7）14 日鉄建材
三景 29（13－9、16－12）21 本田技研熊本
大阪イーグルス 31（16－15、15－13）28 トヨタ自動車

▽6月12日（ジャスコ体育館）

日鉄建材 20（10－9、10－8）17 本田技研熊本
中村荷役 24（11－12、13－12）24 トヨタ車体
トヨタ自動車 27（13－11、14－13）24 三景
大阪イーグルス 28（10－5、18－11）16 大阪ガス

▽6月25日（大崎電気体育館）

中村荷役 25（9－11、16－7）18 本田技研熊本
三景 26（15－8、11－11）19 大阪ガス
トヨタ自動車 31（15－12、16－11）23 トヨタ車体
大阪イーグルス 32（14－17、18－9）26 日鉄建材

▽6月26日（東京重機体育館）

トヨタ車体 28（14－15、14－10）25 大阪イーグルス

	【車体】	得	【イーグ】	得
GK	工藤	0	貴田	0
GK	近藤	0	信木	0
FP	山本	0	源野	5
FP	藤長	0	飯田	0
FP	萩原	4	辻本	14
FP	浜口	12	杉尾	0
FP	松井	2	三谷	1
FP	石原	0	勝本	0
FP	佐藤	0	成瀬	1
FP	中島	7	岩本	3
FP	大塚	3		
FP	飯笹	0		
PT	(2)	23	(1)	24

（審・羽田、菊池）

本田技研熊本 33（16－14、17－15）29 トヨタ自動車

	【熊本】	得	【自動車】	得
GK	岩木	0	玉津	0
GK	森	0	中西	0
FP	田上	8	城ケ原	3
FP	斉所	10	小山	8
FP	入江	0	高木	0
FP	岩永	1	相本	0
FP	岡崎	2	近藤	2
FP	佐伯	6	川田	6
FP	中村	5	香井	5
FP	鯖江	1	大川	0
FP	益田	0	久本	1
FP			松永	4
PT	(3)	33	(3)	29

（審・青木、浜田）

中村荷役 25（7－9、18－8）17 大阪ガス

	【ガス】	得	【中村】	得
GK	森	0	飯塚	0
GK	福田	0	高橋	0
FP	奥野	3	飯田	1
FP	岩本	3	松本	4
FP	竹志	2	坂口	1
FP	藤井	0	西窪	3
FP	竹内	0	大木	1
FP	藤田	2	大戸成	9
FP	新家谷	0	辻	0
FP	長田	3	三尾	5
FP	中村	4	塚田	0
FP	山崎	0	窪田	1
PT	(3)	17	(2)	25

（審・水越、笠井）

三景 25（12－6、13－8）14 日鉄建材

	【景三】	得	【日鉄】	得
GK	中村	0	蓑輪	0
GK	野田	0	川上	0
FP	犬飼	4	若本	1
FP	田畑	3	素原	0
FP	藤山	4	清原	0
FP	白倉	0	池辺	3
FP	岡部	3	古川	0
FP	近藤	6	外山	4
FP	山田	2	山口	5
FP	大谷	0	杉本	1
FP	奥村	3	霜村	0
FP			中山	0
PT	(1)	25	(3)	14

（審・島田、栗名）

＜女子＞

▽6月12日（栃木市総合体育館）

東京重機 21（7－7、14－8）15 ムネカタ

	【ムネ】	得	【重機】	得
GK	岩瀬	0	深瀬	0
GK	清水	0	石井	0
FP	藤谷	0	中本	5
FP	岡部	3	香村	2
FP	吉田	0	森田	0
FP	小林	0	福島	0
FP	石田	0	小野	0
FP	大河原	3	沖山	5
FP	石田	0	大前	6
FP	鈴木	3	渡辺	0
FP	佐藤	6	安田	0
FP	和知	0	矢田	3
PT	(3)	15	(7)	21

（審・住尾、広沢）

日本リーグ 前期の回顧

五輪予選を控えて活気

＜男子＞開幕決戦で勢に乗る湧永

オリンピック予選を今秋に控えているとあって、選手も観客も例年になく燃えている印象で、男女とも、なかなかの活気をみせた。

54年の前期から、やや下降気味だった観客動員も、一会場平均一四一七人と久々に千四百台をマーク、好ムードを裏付けている。

開幕戦で、湧永×大同を組みこんだ男子は、津川新監督の湧永が勝ち、そのあとの4試合も、無難に切り抜けて、第二回（昭52）以来の首位折り返しを遂げた。

山本、松本、穂積の巧者トリオに、池ノ上、生駒の巨砲ペア、志賀、GK井藤の守備力という布陣は、さすがにスキがない。試合かけ引きにも富んで、進境を示す日新も、本田技研も、局面的には互角に戦えても、最後は突き放された。

津川監督は「せり合った時の組み立て役がまだ不十分」というがこの面で池ノ上が成長すると、い

っそう厚味が出る。

それは、ナショナルチームにとっても、待たれることなのだ。

一歩を譲っている大同は、当然のことながら、〈逆転優勝〉に自信満々だ。

特に、湧永戦で11—15から14—15に追撃を実らせているのは大きい。

蒲生、大原、柳川、中本らベテランの力が、依然として主軸だが、後期は高村（日体大出）の活躍と、田口の奮戦が勘定できる。

二強の一角を切り崩せるのではとみられていた日新、本田は、やはり、地力という点で、物足りなさが残る。

本田は、GK大畑の好プレーで湧永を苦しめたが、昨年の全日本総合同よう、終盤で固さをのぞかせ、またしても惜しい星を落した。

日新は、湧永の乱調につけこんでせり合ったが、主導的は握れず大同戦も、射ち合いに持ちこんだものの、ペースはつねに大同のものだった。

西山にいっそう鋭さが加わり、本田をおさえて〝三番手〟には、定着した印象だが、さらに上をみての健闘を望みたい。

あらゆるところで指摘されるがいつまでも、優勝争いを湧永、大同にまかせ放しでは、リーグそのものの発展が果たされない。

大崎、三陽の関東勢は、今季も平凡な星に終った。

大崎は、ホープ山本（大阪体大出）、GK矢内（国士館大出）が日本リーグの雰囲気になれれば、かなり働きそうで、後期の伏兵ぶりに興味をかけたい。

三陽は砂川がPT得点で一位になるなど着実なところをみせたが相変らず守りが雑で、（5試合130失点）、この弱点を、どうカバーするかが課題だろう。

全般的には、二強の強味はあるものの、一～六位間のレベル差が詰まり、内容のある試合が多くなっている。

後期への期待をいつも以上にそそられるのだが、国際事業とのからみで、来春（一月二十七日～二月十二日の予定）まで日程で持ちこされたのは、なんとも味気ない。予め対応できたことだけに、関係者の無策は責められよう。

女子は三強が順当に勝ち星を……

女子は、上位カードといえば立石ブラザーぐらい。

強豪にとってはトライアルがつづき、順当な結果で終っている。

予想どおり3勝でトップに並んだ立石、大崎、ジャスコはそれぞれ持ち味がよく出ていた。

新鋭主体で一まつの不安を抱かせたジャスコもGK矢部を守りの要（かなめ）に残したことが大きく、寺沢の攻撃力も、かなり力強くなってきている。

立石は、やはりイレシュを中央に据えた守りの固さが光る。

ブラザー戦の制勝などは、その好サンプルで、大崎、ジャスコも攻め崩しには骨をおりそうだ。

もちろん攻撃もいい。名手・木下が抜けて展開力に心配があったが、薮田、近藤、江口らが思い切りのよいプレーをみせ、イレシュも脚力の衰えはあるが、ここそという時のポストでは、威力をみせる。

大崎は、李京姫が出遅れているが、李相玉が絶好調、石井、宮島徳渕、ベテランの主砲・西らの攻撃陣も冴えている。

三強に比べブラザー以下は安定感に欠ける。

大崎、ジャスコ戦を残すブラザーには、まだ優勝の望みが残っているが、杏原がマークされるとたんに攻め口が乏しくなるのを、後期までに、どうするかだ。負傷した増永の復活が待たれよう。

日立、ビクターは、かつての活気にかける。

前田、大高の日立、志村、武藤のビクター。十分に上位戦線に加われるパワーを持っているのだ。奮起を待ちたい。

大和は各試合に善戦、リーグを盛りあげたのは賞していい。後期のジャスコ、ブラザー戦は、あるいは、もつれるのではなかろうか。

八木一人の北国は、竹、藤田らにみるべきものがあり、Bクラス戦線をイキの抜けないものにしている。

二部（男子）は、トヨタ車体がイーグルスを降す金星があり、新加盟のトヨタ自動車も三景を破る殊勲。三勝一分の中村荷役がトップに立っているものの予断は許さず大混戦の様相である。

個人タイトル争いは、これからが勝負どころだが、男子シュート率で、柳川（大同）が〝7連勝〟を狙う松本（湧永）をおさえているのが目立つ。

男子のポイントでは、フィールドゴールと合わせて、西山（日新）が蒲生（大同）をしのいでトップ、女子は予想どおり、フィールドゴールでは八木（北国）、ポイントでは志村（日ビ）が各1位。

シュート率は宮島（大崎）が唯一人七割台で走っている。

男子・山本（湧永）の連続試合得点はついに65。立石のチーム連勝22とともに、この先、どこまで突進するか、大きな楽しみといえよう。

（S）

●第11回インテラムニアカップ

日本女子ジュニア初優勝を飾る

山崎　武

女子ジュニアナショナルの登竜門として、国際経験として、また我々スタッフは海外での適応力を知り、諸外国のハンドボールの攻防の知見と情報を得ることを目標として、昨年に続きこの大会に参加した。

3日余りの合宿を行ったものの選手全員が揃ったのは出発当日。不安がないと言えば語弊があるが何故か意外と落ち着いており、不思議と緊張感はスタッフ、選手とも感じなかったのは、昨年の経験者がいたせいであろうか。あるいは、24時間、2万km先の事であるせいであろうか……。

今回の我々の相手国は、イタリア、フランス、カナダ、台湾、ガボン（ヨルダンは不参加）の5カ国。昨年の覇者、中国の参加はなかったものの、力の差はあまりないと聞く。

▽第1戦（7月4日）

選抜とは思えないまとまり

日　本　27（1512―1110）21　イタリア

○…初戦の相手は、地元のイタリア。ロングヒッター武藤、ゲームメーカー秋成を欠いての日本。立ち上がり、いきなり塩屋、山岸が警告を受け不安なスタート。8分を切る頃、山岸のロングをきっかけにゲームが流れはじめ、以後一進一退の攻防が続き、前半辛くも2点差で折り返す。

後半、日本は全員がよく動き、山内、野嶋のシュートが連続して決まり、加えてGK竹下がよくシュートをカット、後半15分には22対15とゲームの流れから見て勝利を確信出来た。エースなきチームまさに今回の日本チームの特徴であろう。それだけに、全員がお互いをカバーし合い、選抜とは思えないまとまりを示した第1戦であった。

＜得点＞若水2、塩屋1、山岸3
時実6、小口5、野嶋4、山内5
近藤1

▽第2戦（7月6日）

最強フランスに劇的引き分け

日　本　31（1417―1615）31　フランス

○…今回参加国のジュニアナショナル部門で最有力チームのフランス、加えて会場は満員の観衆、これ以上の舞台はない。日本は第1戦で見せたまとまりが出るか。選手の足は軽いと谷口コーチ。

フランスのスローオフ、開始1分、相手反則に乗じ小口の速攻で幸先よいスタート。2分野嶋のステップシュート、3分若水のステップがフランスの抜を抜いて決まるがフランスも力強いカットインとロングで一歩も譲らず、試合は流れる。前半14分山内のミドルシュートが決まり、10対8とした時山内が突然倒れる。〝捻挫〟日本のリズムが崩れる。逆にフランスのリズムにゲームが傾く。25分には14対14となるも終了2分前山岸がロングを2本決め、辛くも2点差で前半を終了。

後半もフランスのペースで試合が進められ、15分には25対25と同点。日本もシュートこそ打つが決まらず苦しい戦いとなるも、時実、塩屋がディフェンスで頑張りスタンドを興奮させる。終了2分前、31対30とフランスが逆転、しかも野嶋の反則退場で絶体絶命のピンチ。しかしながら、ラスト攻撃、大きく回り込んだ山岸のロングシュートが決まり、劇的な引き分けに持ち込んだ。

＜得点＞若水6、塩屋2、山岸4
時実1、小口9、野嶋8、山内1

▽第3戦（7月7日）

事実上の決戦に勝つ

日　本　36（1620―1418）32　台　湾

○…事実上の優勝戦。会場を二

分する応援、異様な雰囲気の中でのスタート。いきなり立ち上がり3点連取されるも、5分塩屋のカットインシュートをきっかけに野嶋が立て続けにステップ、塩屋のペナルティを野嶋が決め、試合を振り出しにする。リズムに乗った日本は、7分から服部のペナルティまで何とロング、速攻、ポストと10点連取の素晴らしい猛攻を見せ、15分には12対9と逆転するも台湾のエース劉に楽々と得点を許し、前半はイタリア、フランス戦に続き2点差で折り返す。

後半20分、日本若手の近藤、森山、服部がよく頑張るもついに29対29の同点。この直後22分、若水のサイド攻撃をきっかけに、前半についで2度目のかため取りが開始。若水、小口、野嶋、野嶋、小口、若水と7連続得点。守っても時実がよくリードし、台湾の攻撃をラスト10分3点におさえ、5月のアジア予選より強力メンバー（鈴木、谷口評）と言われた台湾を破った。今日の日本チームの勝利はまさにチームワークと彼女たちの集中力が勝負所で発揮されたゲームであった。

なお、この試合でGK竹下が大腿筋上部に筋断裂を起こし、山内についで2人目の負傷欠場をよぎなくされる。

＜得点＞若水5、塩屋4、時実4
小口10、野嶋12、服部1

▽第4戦（7月8日）

今大会二度目の引分け

日本 23（15―9、8―14）23 カナダ

○…星のつぶし合いの中、今日勝てば優勝、負ければ3位。入念なミーティングの後試合開始。スタッフの杞憂を吹き払うかのようにGK大西の好守を軸にスピーディな攻撃を重ね、前半15対9と初の6点差で前半を折り返す。

後半、時実の警告を皮切りにディフェンスが乱れ、カナダのロングを立て続けに決められ、開始10分には16対15と貯金は早くも1点。17分には同点、ムードは完全にカナダペースで進められ、20分には塩屋が退場、27分には時実が退場とまさに絶対のピンチ。ここをGK大西の思い切りのよいキーピングが日本を救う。28分には若水のペナルティを小口が、そして29分小口のサイドと1点のリードで逃げ切るかに思われたが、カナダの最終攻撃、終了間近にロングを決められ、今大会フランス戦に次いで2度目の引き分け。

しかし、この時点でフランスが台湾に勝たない限り日本の優勝はほぼ確定的となった。

＜得点＞若水1、塩屋1、山岸5
時実3、小口6、野嶋7

▽第5戦（7月9日）

全員得点で優勝飾る

日本 27（15―2、12―8）10 ガボン

○…予想通り？　台湾がフランスに勝ち、日本はこの試合に勝てば自力優勝と慎重なスタート。立ち上がりガボンのスローペースに巻き込まれ、10分までに2つの警告、1つの退場をとられベンチをいらだたせた。ようやく13分若水のカットイン、若尾、近藤の速攻でリズムをつかみ得点を重ねる。加えて、ディフェンス面ではガボンの攻撃を早く読み、早いチェックでつぶし、前半失点を2点に押えて折り返す。

後半、近藤、時実の速攻と得点を重ねるも、ガボンもようやく日本の攻守に慣れ、強引なカットインで得点を重ねる。しかし、余裕を持った日本は、下條、近藤、森山らが生き生きと走り、打ち、ラスト15分には22対6と嬉しい国際大会初優勝を不動のものとした。

なお、このゲーム日本選手が全員得点。

＜得点＞若水2、塩屋3、時実3
小口6、山岸1、野嶋5、下条1
松尾1、近藤4、森山1

ホンジー招待に参加

この後開かれたホンジー招待ハンド祭りは、オープン参加の形で行われ4試合経験をつませる事が出来た。ここではテラモの大会の反省を含めて、今年初参加の若手の経験をより積ませる事、ジュニアの長所、短所の確認を目標にゲームを行った。結果は次の通り。

▽7月11日
日本 14―11 カナダ
イタリア 30―29 日本
＜得点＞若水4、武藤10、塩屋1
時実3、小口3、野嶋5、下條1
松尾2

▽7月13日
日本 33―15 ガボン
＜得点＞若水1、武藤3、塩屋1
山岸3、時実1、小口4、野嶋5
下條2、松尾4、森山3、近藤4
服部2

日本 33―20 チェコ
＜得点＞若水2、武藤8、山岸6
小口9、野嶋3、下條1、近藤2
服部2

以上のように7月4日から13日まで、各国ジュニアナショナルを相手に9試合を消化し、初期の目的に達せられたものの、今大会の優勝が日本の力とは誰もが言いきれない。今秋、第4回世界女子ジュニア選手権、同じゾーンには中国、韓国はじめポーランド国際大会で優勝した東ドイツと強敵ばかりである。日本の将来を占う意味でも選手ともども残された期間、山とある課題を消化すべく努力あるのみである。

第10回世界男子ハンドボール選手権大会を観戦して

情報録画による世界的視野を広めよう

新しいファン層の発掘と指導者・選手には 世界の技術の流れを解明する大きな意義

小西博喜
〈関西学生ハンドボール連盟副理事長〉

素晴らしい興奮を生む大試合

1982年3月、われわれ関西学生ハンドボール連盟は、初のヨーロッパ遠征試合を実現すると共に、第10回世界男子ハンドボール選手権大会（於西ドイツ・ドルトムント）の順位決定戦・優勝戦を2日間にわたって観戦する機会が与えられた。誰しも一度は直面したい世紀のクライマックスの場を体験できたのである。今以てその感動が甦えってくるほどだ。

観客16、000人を収容した館内は、さすがに熱気をはらみ興奮のるつぼである。世界各国役員関係者の民族衣装をまとった雰囲気は、矢張り世界選手権ならではのスケールの大きさとその重味を感じさせた。

国内TV録画でみるヨーロッパサッカー選手権等は、いつ見ても人の波、怒濤のどよめきとうずがスタンドをゆるがし、うらやましい限りである。しかし、ハンドボールにもこのシーンが演じられるのを見て気を取り直した。〝ヴァーッ、スゴーイ〟思わず感嘆の声が異句同音に出る。

試合は体格・体力・気力・技術共に国を挙げてのナショナリズムに徹し切った壮烈無比のしのぎを削る戦いの場であり、一国の全総力を結集したセットスクラムは、とにもかくにもすさまじい火花の一語につきる。

そこには国情の差があるとはいえ、武器こそ持たないまでもボール1個に肉弾相打つむき出しの表情と闘志が、怒濤のような歓声とともに爆発する時、国民性の根強さが実感として伝わって来る。

そして、いつ止むとも知れない大合唱の旋律の中で、果してこの舞台に日の丸を立てることが出来るのか、出来ないのか、ふと自問自答を重ねながら閉会式を最後まで見守ったのである。

もうそこには遠来の客としての外交辞令的同情は期待できないし、仮りにあったとしても、それはすでに過去の遺産であって、現実はそんなに生やさしい甘いドラマではないと感じた。

ビッグゲームTV放映の夢を……

ところで、このような史上まれに見るドラマティックな大試合を収録して日本に持ち帰り、全国ハンドボールファンの前に、TVを通じて茶の間へ紹介できれば新しいファンを生み出すためにも素晴らしい広報活動であるに違いない。日本人同志で見るハンドボールゲームとはおよそスケールを異にした激闘の試合ばかりで、優勝したソ連のように身長200cm台をずらりと並べた壮観さは見事であり、その巨漢から繰り出す想像もつかないようなダイナミックなシュート、ゴールキーパーの緊張感にみちた守備動作、その間隙を突き破っていくユーゴ（第2位）の果敢な切れ味、どれひとつを見ても失敗はまず許されないのが鉄則である。さすがにナショナル代表として洗錬された個人技は随所に見られるが、一旦、ノーマークシュートでもはずそうものなら、怒号と口笛、ラッパなどを使って容赦なく罵倒され、本人は頭をかかえて逃げ出したい位恥かしい思いをしなければならない。それ程一挙一投足にきびしい評価と視線が集中する。こんな光景を感受性の強い日本の中・高校生が見れば、まさしく〝これが世界ハンドボールのきびしさだ〟という感動と深い感銘を受けることだろう。

――と思うと、われわれだけが見ているのが惜しい気がしてならなかった。恐らく見た人は学校体育、社会体育、地域スポーツの底辺に至るまで、従来のハンドボールイメージとは一段と違った認識と動機を与え、共感を呼ぶに違い

1982年（WM）男子決勝，ソ連対ユーゴスラビアの息づまる熱闘

ない。そして、若い有能な素材発掘にも一役買うだろうし、ハンドボールのよさは今以上に迫力とセンスを求めるダイナミックなプレーを追って、新しいファンをつくり出すスポーツに変容していくのではないかと期待を抱かせるのである。

しかし、そのためにはまず見て貰う録画を提供する企画が先決である。

韓国ナショナル監督・柳在忠氏は、世界選手権予選リーグより録画撮りの専門技師を大会期間中滞同し、好カードすべてをフィルムに収録する周到さをみせ、韓国協会の積極的な姿勢が伺われたのである。

少なすぎるPR的情報サービス

日本に於ても普及部・強化対策部がタイアップした事業としてスポンサーの提供と合せて年間を通したスポーツ番組を編成し、全国ネットワーク、民放等で取り上げて貰う企画を急がねばならないし、予算編成の面でも検討を要する問題であろう。したがって、そのためにはタイトルをかけた商品的価値の高い（誰が見ても面白い、楽しい、スリルに富んだ、また見たい）試合内容を紹介していかなければならない。

現代の人気スポーツである野球、バレーボール、サッカー、ラグビー、アメリカンフットボールなどに比べて、ハンドボールは余りにもこういったPR作戦的な情報サービス（TV録画）の提供が少な過ぎる。

現状はハンドボール指導者、学校体育、社会体育指導者に対して、世界の実力を観戦する情報や機会が十分提供されていないのが致命傷、そのことが中・高校生にとって魅力あるスポーツとして、人気スポーツとしての興味に欠ける直接の原因ともなり、上記スポーツクラブへ逸材の頼もしい選手が流れてしまい、２番煎じ、否それ以下でさえも確保出来ないという結果に終り、部活動存続だけでも精一杯といった傾向が極めて多いことを聞かされる。

勿論、数多くの指導者が容易に海外遠征出来る機会があればよいが、ヨーロッパのように国境ひとつ越えて行けるようなわけにはいかない。

しかし、経済的には勤務の支障に関係なくTV録画の情報さえあれば、正確な動向がキャッチできる時代でもある。

つまり、日本男女ナショナルチームの海外遠征は云うに及ばず、世界の技術情報や大会の好カード

を収録し、協賛企業やスポンサーの提供を開発することによって、全国ネットワークや民放への接渉が実現すれば、日本人の体格、体力を基盤にした技術研究はさらに活発化した論議を呼び、ジュニア対策指導にも拍車がかかるだろう。同時に映画企業とタイアップした映画製作事業も必要な課題となっている。

こうした情報活動の利用により日本チームの勝因・敗因の分析や、戦術、戦力面の比較検討を加えながら世界の実力格差を指導者、選手一人一人が真剣に身近に理解することができるのである。

今、小・中・高校の指導者が最も知りたいひとつは、世界のトップレベルにあるハンドボール技術について、フォーメーションの図解や説明もさることながら各国ナショナル選手のひとつひとつのプレーが、試合の流れの中でどのように展開され、技術的に変化していくのか、各自の目で生きた技術プレーを確かめ、世界的視野を深めて行きたいことではなかろうか。

そして、日本選手のプレーが世界的実力レベルと比較して如何なる部分が不足し、弱点となっているのか、今後の現場指導に際し、具体的に何を強化育成し、改善していけばよいのか、技術指導をどのように工夫すればよいか、それぞれの立ち場で指導体系を確立し指針としたいことではなかろうか。

機関誌や雑誌の戦況報告やコメント、カット写真の一部分では試合の全貌を把握することは困難であり、ゲームの実感をつかみとることも不可能であろう。要は言葉の伝達や活字数字の表現のみでは指導技術や展開の説得力としては限界がある。矢張り人それぞれの感覚的領域で理解しないと、新しい発想や豊かな国際的感覚といったものは吸収出来ないように思われる。

録画撮りで底辺のレベルアップを

〝百聞は一見にしかず〟とよくこの言葉を口にする。その一見を指導者に限らず、あらゆる人達の理解を得るために強く印象づけたいのである。それは決して好き勝手をいう評論家や野次馬的ファンを養成するものではない。物事を客観的に価値判断するためには多くの人達の〝ファンの目〟が必要であり、逆にそういった客筋のファンが1人でも増えていくことを大いに結構としたい。

また、好き勝手を聞く耳を持つ度量の器もこれからの指導者の資質として、持ち合せることが必要であろう。

そこで、ハンドボール指導者にとっては、まず選手の人材発掘がチームづくりの戦力を占う要素であることから、技術指導と合せて選手強化への糸口となり、将来の抱負をになう選手育成の手がかりをつかむためには、録画の教材提供はどうしても必要なのだ。

そして、それぞれの指導方針に基づいた次の構想が描かれ、常に世界的視野に立った技術目標が現場の指導に生かされていくものと思う。その意味で貴重な海外遠征のビッグゲームを普及・強化・広報の3本柱として録画撮りの企画作成を望みたい。

現状では確かに人権費、製作費等財源の面で難問をかかえてはいるが、日本ハンドボール界の将来を展望する時、地理的、経済的生活条件等を勘案すれば教育的見地から考えて底辺のレベルアップは直接、頂点強化につながる鍵であり、あらゆる情報化の利用が指導者研修の場でもあるはず。

そのため、録画広報活動の財源確保や、その協力については何をおいても惜しんではならないし、ハンドボールが大衆スポーツとして成長するためのエネルギー源であることを強調したい。

さて、前回の世界男子選手権における西ドイツ協会の資料分析によっても明らかなように、世界各国のシュートに対するきびしさは言葉に絶するものがある。

すなわち、攻撃の最後は、血肉を切るシュートであり、痛恨のシュートは、絶対に許されないのである。

さらに、積み重ねられたトレーニングの成果は、シュート効率のアベレージによっても明確であり、その成否は監督、コーチ、選手自身の責任において問われることが結論である。そのための弁解はまず御法度であるようだ。名将とうたわれた西ドイツナショナル監督・ステンツェル氏も本大会で7位という不振の成績により、西ドイツ協会より解雇されるという責任追及の処置で、ひとまず新生西ドイツのスタートを切ったようだ。

本大会で日本は14位という不振の成績に終り、続くアジア大会でも中国に敗れるという低迷現象が生じたが、まず謙虚な反省に立って、再起改善方法のあらゆる機能回復対策は当面の重要課題ではあるが、長期的な予測と推移をみた試行錯誤の努力によって新しい活路と展望が期待出来るものであることを強調したい。

ここに1982年第10回世界男子ハンドボール選手権大会観戦の印象と、さらに熱い願いの一端をこめて拙稿を終りたい。

第3回全国クラブ選手権

大同クラブ（男子）が初優勝
―女子はあゆみクラブ二連勝

第3回全国クラブ選手権大会は7月22日から24日までの3日間、岐阜県で開催された。

男子24チーム、女子16チームが参加して行われた今大会は、男子が8ブロック、女子が4ブロックに分かれて予選リーグを行い、決勝トーナメントへと進んだ。男子は、元ナショナル選手を擁する大同クラブが実力を発揮、初優勝、女子はあゆみクラブが2年連続2回目の優勝を飾った。

＜男子＞

▽予選リーグ

○Aゾーン
ブルーウイングス 16−11 三原ク
日川ク 22−15 ブルーウイングス
日川ク 31−14 三原ク

○Bゾーン
新居浜ク 18−14 八幡ク
新居浜ク 16−13 アシスト岐阜ク
アシスト岐阜ク 18−13 八幡ク

○Cゾーン
大同ク 32−8 ビッグボスク
大同ク 14−10 四六G会
四六G会 25−17 ビッグボスク

○Dゾーン
氷見ク 18−15 東山ク
氷見ク 18−13 七戸ユニオン
七戸ユニオン 14−12 東山ク

○Eゾーン
桜門会 24−10 フェニックス
桜門会 14−10 小松ク
小松ク 23−12 フェニックス

○Fゾーン
セブンスターズ 21−12 本渡ク
富岡ク 17−12 本渡ク
富岡ク 19−12 セブンスターズ

○Gゾーン
岩国ク 19−9 生駒ク
筑波振球会 17−14 岩国ク
筑波振球会 19−17 生駒ク

○Hゾーン
湯沢ク 34−15 武庫工ク
湯沢ク 19−15 二俣ク

▽決勝トーナメント1回戦
二俣ク 30−18 武庫工ク
日川ク 24−9 二俣ク
大同ク 12−10 セブンスターズ
桜門会 22−14 七戸ユニオン
筑波振球会 17−12 アシスト・岐阜ク
岩国ク 14−8 新居浜ク
氷見ク 14−12 小松ク
富岡ク 17−10 四六G会
湯沢ク 16−15 ブルーウイングス

▽準々決勝
岩国ク 15（8−9、7−5）14 日川ク
大同ク 19（7−8、12−9）17 氷見ク
桜門会 20（9−8、11−7）15 富岡ク
湯沢ク 20（11−6、9−8）14 筑波振球会

▽準決勝
大同ク 16（5−9、11−5）14 岩国ク
湯沢ク 22（14−4、8−6）10 桜門会

▽3位決定戦
岩国ク 20（8−8、12−4）12 桜門会

▽決勝
大同ク 24（12−7、12−6）13 湯沢ク

得	【大同】		【湯沢】	得
0	小野	GK	吉田	0
0	福井			
1	野田	FP	佐々木	2
5	藤中		古関	2
2	加藤		菅野	2
4	松原		近野	1
7	花輪		藤原	1
3	清崎		柴田	3
0	伊藤		斉藤	1
2	更谷		佐藤	0
0	桑幡		阿部	1
24	(1)	PT	(1)	13

（審・吉田、久保田）

＜女子＞

▽予選リーグ

○いリーグ
滋賀ク 13−13 ポストク
大分東シニアク 11−10 滋賀ク
日川ク 13−13 滋賀ク
ポストク 14−9 大分東シニアク
ポストク 11−6 日川ク
日川ク 15−7 大分東シニアク

○ろリーグ
あゆみク 20−3 風見鶏ク
あゆみク 9−8 広島ク
あゆみク 16−10 武蔵野ク
風見鶏ク 8−6 広島ク
風見鶏ク 7−15 武蔵野ク
広島ク 14−9 武蔵野ク

○はリーグ

神埼ク　9－11　古都ク
神埼ク　13－11　大曲スポーツク
神埼ク　9－15　名古屋ク
古都ク　11－13　大曲スポーツク
古都ク　11－10　名古屋ク
大曲スポーツク　12－15　名古屋ク

○にリーグ
光電ク　19－7　腕満会
光電ク　18－7　鶴見ク
光電ク　14－9　TDKク
腕満会　7－9　鶴見ク
腕満会　8－4　TDKク
鶴見ク　10－8　TDKク

▽準決勝
あゆみク　12（6－5、6－6）11　ポストク
古都ク　19（7－7、6－6、3－1、3－0）14　光電ク

▽3位決定戦
ポストク　24（10－10、14－4）14　光電ク

▽決勝
あゆみク　17（9－6、8－6）12　古都ク

得	【古都】		【あゆみ】	得
0	滝本	GK	山本	0
0	田村	GK		
1	秋田	FP	辻本	5
2	川崎	FP	重村	3
0	円山	FP	平田	0
5	矢野	FP	山下	1
1	山戸	FP	辻	2
0	黒木	FP	山本	6
2	岩本	FP	宮崎	0
0	多田	FP		
0	竹内	FP		
1	正本	FP		
12	(0)	PT	(2)	17

（審・竹内　有岡）

第3回全国クラブハンドボール選手権大会を開催して

岐阜県協会理事長　上妻　忠夫

昭和51年度より4年間、本大会女子の部の前身である「岐阜カップ全国女子クラブハンドボール選手権大会」を開催してきた本県にとっては、3年振りに開催するクラブチームの全国大会であった。

本県協会は、今までにおいてもこの種の特別行事は数多く実施してきた。そして、その都度、行事の実施とは別に必ずもう一つの目的を持って実施してきた。

そこで、今回は過去の大会運営と異なり、本県クラブチーム関係者中心による大会運営を考えた。前年度「東海クラブハンドボール選手権大会」を自分たちの手で運営し、それを機に岐阜県クラブ連盟の組織が確立できたので、今回は本大会の運営を通して、組織の強化をはかるべく、積極的に取組んでもらった。

大会運営については、参加チームの皆様に決して満足してもらえるものではなかったと思われるが、日本協会の適切なる指導、助言、東海協会の協力により、どうにか無事終了する事が出来、組織の強化についても、それなりの成果があったので、大会開催は本県にとって価値あるものであったと思われる。唯、今後においても、本大会は継続開催されるであろうから、本大会開催についての問題点を提起しておこうと思う。

1、大会期日、会場の決定について

前年度大会開催時に各地区クラブ代表者会議で、8月第1週本県開催が内定したとの事であるが、その時期には全国高校総体が隣りの愛知県で開催される事は以前より決定していたはずである。本大会が、日本協会の公式大会であるのならば、何故二つの全国大会を同時期に、ましてや同地区で開催するという案が承認されてしまったのであろうか。あまりにも参加者側本位の話し合いではなかったろうか。日本協会関係者の適切なる指導が何故なされなかったのか、非常に残念でならない。更に、このような事情から大会日程を7月に変更した事をかなり早くから日本協会へ連絡したにもかかわらず、ブロック予選が申し込み締切日以後にも実施されたという事実もある。

本大会も公式大会となって3年目、大会期日、会場、ブロック予選等に対する日本協会の主体性を期待すべきなのか、クラブ関係者の意見を尊重すべきなのか、結論を出す時期ではないか。今後、主管する都道府県協会への負担軽減のためにも、明確にしてほしい問題である。

2、本大会の権威について

前にも書いたように、大会申し込みが締切日に遅れるという事実、代表者会議に欠席しても試合には出場出来るという事実、大会参加料を納入せず参加するチームがあるという事実等、日本協会の公式大会とはとても思えないような低次元の問題点がある。

また、審判についても、当該地区審判長に一任してしまうという事実等を考え合わせると、本大会の位置付けについても明確にしてほしいと言わざるを得ない。

新しい大会であるがために、試行錯誤的な面はあろうが、お互いスポーツマンであり、大会運営側は運営側として、大会参加者側は参加者側としてのルールは守るべきではないか。

特に、参加者の運営者に対する配慮を期待したい。

3　本大会の将来構想について

今までに述べてきた問題点の解決をはかろうとすれば、そこには当然、本大会の方向づけがなされるはずである。残念ながら、現段階では方向づけがなされていないため、問題が山積みしているのである。せめてチャンピオンシップの大会なのか、フェスティバルの大会なのかだけでも明確にすべきではなかろうか。

更に、クラブチームというものの性格も明らかにしていかなければならないであろう。安易に我々はクラブチームという言葉を使うが、本大会の参加チームの中にもいろいろなクラブチームがあった。

一体、この大会ではどのようなクラブチームを対象に考えていく事が最良の方法なのであろうが。

もっと大きな見方をするならば、ハンドボールの振興計画なる長期的計画がまったく確立されていないという事である。全体計画の中で、クラブチームというものの位置づけ、あるいは、クラブチームに期待する部分というものがあるはずである。一地方で、微力ながら精一杯ハンドボールの普及、振興に携わる者として、あえて苦言を呈した次第である。

特別手記

二度の全国制覇とげた名門校の血と汗の記録

拝島中10年間のハンドボール

青木 徹〈現多摩中 元拝島中〉

スタミナと組織プレーの養成

東京の中学ハンドボールの歴史は、都中体連発足と同時で35年の歴史である。僕が前任校の拝島中での10年間で、2度の全国優勝、1度の準優勝をすることが出来たのは、東京の中学ハンドボールのチームの数を増すとともに、全国のトップレベルに育てた諸先輩先生のおかげだといって良い。

過去に、東京の中学ハンドボールは、現ハンドボール部長である山野圭三先生(現第四砂町中教頭)が指導された深川五中に代表されるハイスピードの組織プレーを中心とした、攻撃型のチームが中心であった。速い走りと速いパスワークとコンビネーションプレーを駆使し、速攻もセットオフェンスも、足を使った攻撃で先手先手と攻めていくのである。この深川五中と同様に数多く都大会に優勝しているチームに深川四中がある。このチームも正確なプレー、速い攻撃を主とするチームであった。

僕が教員になった年の13年前の都大会では、深川五中の平均身長160センチ程度の選手が、速い走りと、パスワーク、コンビネーションプレーで、それよりはるかに大型でパワーのあるチームを何チームも圧倒的な大差で破り優勝したのが、今でも印象に残っている。その後、都大会の優勝チームは、大島中、深川四中、大島中、南六郷中、国立二中とかわるが、いずれのチームも、スピードを中心とする攻撃型のチームであった。その中には大型のチームもあったが、大型でパワーにたよるというより、大型でも、スピードと組織プレーを中心としたチームが主流であった。

東京で勝つためには、5～6日間にわたって連日行なわれる試合にすべて勝つ体力、とくにスタミナが必要である。しかも、準決勝、決勝では、試合の雰囲気にのまれない精神力が必要となる。その上で、スピードのある組織プレーが出来ないと途中で負けてしまうのである。

拝島中での最初の3年目のチームは、速攻を主とするスピードのある攻撃型のチームを作ったつもりであった。しかし都大会では、その年優勝した深川四中とあたり、速い走りからのロングシュートをきめられ負けてしまった。それからのチーム作りは、先輩の先生方が作ってこられた東京の中学ハンドボールの特徴である速い走り、組織的なプレー、しっかりしたディフェンスからの速い速攻、これらの出来るチームを目指し、再度チーム作りにはげんだ。

練習の中心は速攻。必ず走ってプレーをすることに心がけ、シュート練習でも、出来るだけ走る距離を長く、スピードをつけて打たせることを心がけた。速攻は必ず毎日1時間以上練習した。2対1 3対2の練習も速攻の中に組込んで練習した。

こうした中で、5年目のチームは、都大会で準優勝することが出来た。(このチームは、その年関東大会で優勝した佐近山中にも練習試合で勝っている)。

6年目のチームは、新人戦で都大会に優勝することが出来た。そして、その年から関東大会に出場することになる。(その年も含め、都中体連ハンドボール部は、関東、全国大会に代表を送ることが時期尚早ということで代表チームを送っていない。)その年の関東大会の要項が、都県協会、及び中体連の推薦で出場できるようになっていたので、(当時は中学生大会で、中学校大会でなかったのでクラブチームでも出場できた)都協会の推薦を受けて、昭島ハンドボールスポーツ少年団として出場することができた。

当時、滝口都協会理事長始め、多くの都協会の方に御支援、御協力を得られ、また、ご迷惑もおかけした。

拝島中では、学校の教育課程内の活動は、ハンドボール部として行い、それ以外はスポーツ少年団として行っていた。スポーツ少年団としての活動は、春、夏の山中湖での合宿や春休みの名古屋、大阪方面への遠征などが主なものであった。

親もスポーツ少年団の活動に積極的に協力してくれた。特に1回生のキャプテン、現多摩中教諭の山崎先生の父、山崎武一氏には、10年間にわたってスポーツ少年団の会長をお願いし、親のまとめ役として、市とのパイプ役、また市への援助のお願いなど、多大な協力をいただいた。

いまも感謝の気持ちでいっぱいである。

初の全国大会では苦汁を飲む

この年の関東大会は千葉県君津市の新日鉄の体育館で行なわれた。楽に優勝できると思い出発したのだが、2回戦に、斉藤先生監督の連田中に苦戦、シーソーゲームの末やっと勝つことが出来た。決勝は比較的楽に勝つことが出来た。こうして全国大会へ駒を進めることが出来たが、関東大会後あまり練習もせず、大阪の中央体育館へ乗り込んだ。こんな風だったので、試合に勝てるわけがない。1回戦は熊本の松橋中に1点差で辛勝、2回戦で、永見西部中とは、5点リードしたあと、スタミナが切れ、大差で逆転負け。

第1回の全国大会を、兄と一緒に名古屋にある愛知青少年公園に見にいった5年前と較べ、中学の全国レベルが非常に上がったのにおどろいた。東京もノンビリしていると、全国から取り残されると感じた大会であった。

この翌年、文部省が全国大会を公認したため、都中体連ハンドボール部も代表チームを関東大会に出場させることになった。関東大会が、都大会より先にあるために、区部総体、多摩地区総体の1位同志で出場決定戦を6月に行った。7年目のチームは、雪ケ谷中と出場決定戦を行い16対8で勝ち関東大会へ出場した。

関東大会は埼玉県浦和市の体育館で行なわれ、準決勝では、昨年と同じ斉藤先生監督の埼玉選抜と激突、大接戦の末、決勝へ進むことが出来た。決勝では、準決勝でケガをした、キャプテンの小山（現中大3）年を欠いたまま鬼怒中と試合を行った。点差こそ開かなかったが何とか優勝することができた。全国大会は茨城県の麻生。大会前の2週間は毎日雨、連日体育館で練習を重ね、上位入賞を目指したのだが、開会式当日は大雨がふったりやんだり、グラウンドは雨ですべりやすかった。大会会場から20キロ離れた宿舎に泊った僕たちは、雨天の際は体育館との大会要項を信頼し、翌日は体育館での試合を期待しつつ、睡眠した。

ところが、翌朝5時半、「天候の関係で、試合時間を予定より30分早くしてグラウンドで行う」との電話で起こされ、あわてて試合会場に向かう。試合会場は雨のためすべりやすい最悪のコンディション、第一試合開始8時30分、対戦相手は、第1回大会優勝監督、稲葉先生ひきいる汐路中。関東1位と東海1位とブロック大会1位同志の対戦する唯一の1回戦。雨の降ったりやんだりの中を試合開始。接戦になることは予想していたが、2年生左腕182センチの大木（現中大二年）が試合前に足をすべらせネンザし、ロングがきまらず、その上、いつもは5～6点を相手チームからモギ取るテクニシャンの近藤（現三景）が不調で、前半2点差、後半に入っても点差は縮まらず、試合終了。我々の試合の終ったあと、雨のため試合は体育館に移されるなど、全国大会の中でもっとも悔いの残る試合であった。

このあと、決勝まで残って試合を見学、関東大会2位の鬼怒中が全国2位となり、うらやましい限りであった。

ついに念願の全国制覇成る！

翌年8年目のチームは、大型左腕の大木、2年生ながらテクニシャンでスピードのある江沢（現中大1年）を主力に、速攻と速いボールまわしからのロング、カットインを中心としたチームを作りあげた。GK宇田川兄(現中大2年)も地味だが確実な守りをしてくれた。

ところが、都の新人戦決勝では、大学1年後輩の緑川先生監督の大島中に僅差で敗れ2位。全国大会優勝を目指していただけにショックは大きかった。春休みには名古屋、大阪、和歌山、滋賀と遠征、昨年全国大会へ出場したチームと5日で20試合消化。全試合勝つことが出来、希望を夏につないだ。6月の関東大会出場決定戦では、大島中に接戦の末、勝つことが出来、関東大会への出場権をえた。

関東大会は東京八王子市。地元ということもあって、大会の前日まで、諸準備の手伝いを行った。大会では、1回戦から決勝まで比較的楽に勝つことが出来、関東大会拝島中として2連勝。関東大会後の都大会では、決勝で大島中と再度対戦、前半で大差をつけられ、後半になって、追い上げたが、追いつけず、全国大会の出場権は得ているものの、チームの精神力の弱さをつくづく感じた。

全国大会は愛知県蒲郡。大会会場と宿舎は歩いて5分。宿舎もすばらしい温泉旅館で、コンディションは最高。1回戦は楽勝、2回戦は、大型チームで強豪の芦城中、始めての対戦に選手は堅くなり、試合開始5分で5点リードされる。この5点差をつめるのに全力をあげる。序々に追い上げ前半で1点差、後半に入りシーソーゲーム、胃がいたくなる試合で、後半終了間際にやっと2点差がつき勝利。芦城中のポイントゲッター園下君が、前半から元気でフル出場できる状態であったら、試合はどうなっていたかわからない。この試合は、拝島中時代の全国大会の試合で、最も精神的に疲れた試合で、試合後、食事がノドを通らなかった。次の日の準決勝は、下松中、体格差にものをいわせ、力でねじ伏せた。決勝の名石クラブは、春休みに試合を行っているので、比較的気楽に試合を進めることが出来た。チーム結成以来8年目にして、念願の全国優勝することが出来た。

隋性の3年生を全員クビ

9年目のチームは「2年連続全国優勝」をキャッチフレーズにスタートした。新人戦は、大学同期の馬場先生監督の優勝した小金井南中に破れた。春休みの遠征も、名古屋、大阪、さらには小松の芦城中へも足をのばした。5月に入り、昨年の随性で練習している3年生を全員クビ、もう一度頑張ってやる気のある3年生だけを入部させた。そのため3年3人、2年4人がレギュラーというチームで再出発、多摩地区総体はやっと優勝、関東大会出場決定戦では、大島中に破れ、関東大会に出場出来ず、その年、全国大会が東京八王子の中大体育館で行なわれるので、地元ワクの出場権が、都大会

優勝チームに与えられるので、すべてを都大会にかける。この年の都は非常にレベルが高く、全国レベルのチームが5〜6チームあったため、どのチームが優勝するかわからない状態で都大会が始まった。準々決勝で荏原二中に逆転勝。準決勝では、国立二中に試合終了30秒前の逆転シュートで勝ち進んだ。決勝は中野三中、接戦の末、3年の江沢、市村の活躍によって優勝、全国大会へ進むことが出来た。

　この後、全国大会の事務局の庶務として、当時立川一中教頭であった香積先生（現全国二中校長）と共に、連日、案内状の作成、発送、プログラムの作成等を行い、夕方になって拝島中へ出かけ、わずかな時間しか練習することが出来なかった。こんな状態で大会に勝てるのだろうか、不安であった。

下松中に苦杯

　全国大会会場は、中大体育館、4面のコートが取れる、全国最大の体育館であろう。1回戦は、新潟の湯東中に楽勝、2回戦は、沖縄の神森中、3点差で勝ち、準決勝は、その年関東大会優勝の連田中と対戦、ポストプレー、コンビネーションプレーから速い展開でミドルシュートを打たれ、前半2点差をつけられた。後半に入りミドルシュートに強い2年宇田川弟（現全日本ジュニア）にGKをきりかえ、エース江沢のカットイン、ロングなどで延長にもち込む。延長でも点の取り合いで、1点差で辛くも勝利を握った。決勝は、昨年3位の下松中、大型でスピードのある好チーム。試合開始すぐに4点リードされ、あわててGKを宇田川に変えるが、試合の流れは変わらず前半4―8で終了、後半に入り序々に追いあげるが、3年江沢に、それまでの試合の疲れが、この試合で出たのか、いつもなら入るシュートがきまらず、その上、速攻でも、2年生がサイドからのノーマークシュートを2本立てつづけにはずすなど、あと少しで同点になるチャンスを逃がした。さらにおい追げムードの中、後半10分、フリースローから2年目黒（現明星3年）が江沢に絶妙なパスを送り、ノーマークで江沢がシュート。ボールがGKにあたり、逆速攻で、逆に点差をあけられ、それまでの追い上げムードが、これでダメ。

　試合の流れも下松中のペースになってしまった。

　あきらめの早い僕は、すぐ全員2年生にメンバーチェンジし、残り10分は、来年度のチームで試合を行った。

　決勝で負けたあとすぐ学校に戻り、新チームで練習開始、翌年のチーム作りを始めた。

東京のチームらしさで再び栄冠

　拝島中最後の年となる、10年目のチーム。

　レギュラー全員が、全国、関東大会の出場経験があり、8年目の大木、9年目の江沢といった大型ポイントゲッターはいないが、全員得点力のある、動きの速いチームである。

　攻撃のパターンも2：4、センタースリー、を中心にいろいろなパターンで攻めることでき、相手のディフェンスの特徴により、また試合の流れによって、攻撃パターンをいろいろ変えた。

　さらに、GK宇田川弟が、非常に堅い守りをするので、速攻の得点も非常に多く、速攻でのパスワーク、速い走りと、東京で過去に築きあげられてきた好チームの特徴に最も近いチームができあがったのである。

　このチームは、都新人戦、都大会などすべての大会に優勝することが出来た。

　春休みには、その全国大会が熊本なので、名古屋、大阪、さらに昨年優勝の山口県の下松、熊本まで足を伸ばして練習試合を行った。

　5月には、再度名古屋の汐路、小松の芦城とも練習試合を行ったものである。

　関東大会は、千葉市で行なわれ、すべて大差で勝ち、全国大会へ進んだ。

　全国に出場した16チームのうち、8チームと練習試合を行っていたので、精神的には楽に大会に臨むことができた。

　しかし全国大会は、どのチームもコンディションを整え、練習試合とはまったく異質な雰囲気になるので、心をひき締め、旅館も春と同じ旅館をとるなどして、細かな注意をした。

　1回戦芦城中、2回戦は神森中、準決勝、汐路中、決勝永川中と、対戦相手は全国大会出場回数の多いチームばかり（その後第10回で神森、11回で芦城中が全国優勝している）で気を抜くことは許されなかった。

　1試合1試合を確実に勝ち進み、決勝も後半で逆転するなど、二度目の全国優勝をすることが出来た。

　10年の間に二度も全国優勝をとげることが出来たのだから、こんな幸せはない。これからもハンドボール界に微力をつくしていきたい。

●●・海外トピックス――TOPICS

ヨーロッパの「全国リーグ」

日本リーグで、その試合方式などを再検討している、という話を聞いた。

そこで、今日は、本場・ヨーロッパの各国リーグのシステムをお伝えしたいと思うのだが、日本との最大相違点は、各国とも、リーグの優勝チームが〈ナショナル・チャンピオン〉になることと、入れ替え戦という方式が、ほとんどないことだ。

日本は、いぜんとして（日本リーグが発足して8年にもなるのに…）ナショナル・チャンピオンは「全日本総合選手権」の勝者である。この考えかたは、古いしきたりからくるもので、簡単に改められないだろうが、それでは、いつまでも「日本リーグ」は、リーグ以外の何ものでもなくなる。

さて、ヨーロッパでもっとも人気のあるリーグは、西ドイツ・リーグ、いわゆるブンデス・リガ。

14クラブの2回総当り、秋から翌年5月までのロング・ランは、完全なフランチャイズ制が布かれ今シーズンは約33万人のファンを動員している。

ヨーロッパで、いちばん多いのが12〜14クラブの2回総当りというタイプでユーゴ、スペイン、ベルギー、ルーマニア、チェコ、ハンガリーなどがそうだ。

一チーム32試合のソ連

近年、多くなりつつあるのが、シーズンの途中で「上級リーグ」と「下級リーグ」に分ける方法である。

いちばん有名なのはソ連で、まず12チームが2回総当りしたところで1〜6位、7〜12位に分け、改めて2回総当りを行なう。

最終試合数は一チーム32試合となるわけだ。

フランスは、もっとこっていて10チームづつ二組の第一ラウンドをまず2回総当りで行ない、各組上位3チームづつで改めて2回総当り、さらに、その1、2位でグランド・ファイナル（決勝）を争う。

イタリアは、12チーム2回総当りのあと、上位4チームがさらに2回総当りの決勝リーグを戦かう。

スイスもこれはほぼ同じだが、決勝リーグが6チームと多い。

スウェーデンは14チーム2回総当りのあと、上位4チームが決勝トーナメントという変ったシステムを採っている。

前期レースで名高いのはポーランド。

10チームが4回総当り、総試合数180というもので、70年代にいちどだけ50万人台のファンを集めた記録を持つ。

（以上、いずれも男子リーグの例から）。

◎世界のニュース◎

来日クラブのきょうこの頃

今夏来日したフランス代表に二人のステラ・サンモール所属の選手でいてオールドファンをなつかせがらした。

ステラは六四年に来日したチームで、ヨーロッパから迎えた初の強豪クラブであった。

そのあと、男女二十を越すクラブが来日しているが、全国リーグの話を伝えたついでに、近況をまとめてみよう。

西ドイツ勢では、なんといってもVfL・グンメルスバッハ。今季も圧倒的な力を示し、西ドイツリーグに2連勝（9回目）したほかヨーロッパ・ゴールデンカップ、ヨーロッパ・カップ、西ドイツカップにも快勝している。

このほかTHW・キールは二位FA・ギョッピンゲンは五位、2部から今季返り咲いたGW・ダンケルセンは7位だった。

スペインのバロンマノ・グラノリエルスも元気で3位、チェコのスラビアプラハは5位。

スウェーデンのドロット・ハルムスタッドは毎年ベストフォアに進出していたが今季は6位とやや不振。

低迷してしまったのはデンマークの古豪スタディオン・コペンハーゲンで2部の中位に〝定着〟してしまった。

女子では、ヒポ銀行（オーストリア）が、ますます強力な陣容を布いて連勝をつづけているが、西ドイツのOSC・ラインハウゼンは数年前に全国リーグから滑り落ち、現在は地域リーグの所属、VfR・マンハイムも同じようなレベルに落ちこんでいる。

なお、これから来日を希望しているクラブのなかでは、ポーランドのスラスク・ウロクラフと、西ドイツのTV・グロスバルスタット（いずれも男子チーム）が強力である。

杉山　茂

西ドイツで「スーパーカップ」（11月1日から）

オリンピックと世界選手権の優勝国（男子）だけが参加できるというビッグトーナメント「第3回スーパー・カップ」が、今秋11月1日から6日まで、西ドイツドルトムントを主会場にして開かれる。

西ドイツ協会のドル箱トーナメントともいえるもので、参加国はユーゴ、ルーマニア、スウェーデン、ソ連、チェコ、西ドイツに今回からモスクワ・オリンピック優勝で〝資格〟を得た東ドイツが初参加する。

七九年の第一回は西ドイツルーマニアの決勝で西ドイツ、八一年の第二回はソ連西ドイツの決勝でソ連が優勝しているが、いずれも記録的なファンを動員、早くも今秋の大会の前評判は上々である。

各地の記録

◇長崎県高校春季選手権

（4月23、24日）

＜男子＞

▽1回戦

長崎南 32−8 佐世保東
波佐見 33−18 鹿町工
佐世保西 26−20 長崎北
日大高 35−14 北陽台
佐世保北 17−12 上五島
佐世保商 23−11 西彼
口加 26−24 長崎工

▽2回戦

瓊浦 29−18 長崎南
佐世保西 28−15 波佐見
日大高 18−8 佐世保北
口加 18−16 佐世保商

▽準決勝

瓊浦 23−13 佐世保西
日大高 25−16 口加

▽決勝

瓊浦 23（2−2、3−1、10−6、8−12）21 日大高

＜女子＞

▽1回戦

佐世保西 34−1 佐世保女

▽2回戦

佐世保商 11−8 有馬商
長崎北 29−6 式見
日大高 12−11 島原商
佐世保北 20−9 佐世保西

▽準決勝

佐世保商 11−7 長崎北
佐世保北 8−5 日大高

▽3位決定戦

日大高 11−5 長崎北

▽決勝

佐世保北 7（4−4、3−2）6 佐世保商

◇山梨県春季高校

（4月23、24、29日）

＜男子＞

▽決勝リーグ

甲府一 20−14 機山工
塩山商 20−20 甲陵
甲陵 28−18 機山工
塩山商 20−16 機山工
甲府一 20−14 塩山商
甲陵 16−13 甲府一

（順位）①甲陵②甲府一③塩山商④機山工

＜女子＞

▽決勝リーグ

山梨 15−6 吉田
日川 21−1 桂
桂 8−6 吉田
日川 18−0 吉田
山梨 12−5 桂
日川 10−9 山梨

（順位）①日川②山梨③桂④吉田

昭和58年度 福井県前期選手権

（4月29、30、5月1日）

＜成年男子＞

▽1回戦

成和送球 29−14 藤島ク
福井大 12−0 スターズ

▽2回戦

福井教員 45−6 成和送球
光陽会 24−20 羽球会
レッドボンバーズ 23−19 九頭竜ク
北陸電力 33−15 福井大

▽準決勝

福井教員 12−0 光陽会
北陸電力 29−8 レッドボンバーズ

▽決勝

福井教員 29（17−11、12−6）17 北陸電力

＜成年女子＞

▽決勝

全福井 15（6−3、9−0）3 ママさんチーム

＜高校男子＞

▽1回戦

高志 30−8 科技

▽2回戦

北陸A 24−9 高志
福井商 18−13 藤島
羽水 26−5 勝山
北陸B 15−13 武生

▽準決勝

北陸A 23−1 福井商
北陸B 16−14 羽水

▽決勝

北陸A 38（20−6、18−6）12 北陸B

＜高校女子＞

▽1回戦

仁愛女 10−7 北陸
福井商 16−3 羽水
福井女 11−3 科技
高志 14−7 藤島

▽準決勝

仁愛女 14−6 福井商
高志 13−4 福井女

▽決勝

仁愛女 23（11−4、12−1）5 高志

◇第10回青森県社会人春季大会

（4月30～5月1日）

▽男子1回戦

海上自衛隊第二航群 21−15 尾上ク
青森自衛隊 26−21 野辺地工高OB

▽2回戦

青森ク 31−21 海上自衛隊第二航群
野辺地ク キケン 弘前ク
青森教員ク 31−19 青商ク
七戸ユニオン 39−17 青森自衛隊

▽準決勝

青森ク 29−25 野辺地ク
七戸ユニオン 25−23 青森教員ク

▽決勝

青森ク 29（17−17、12−8）25 七戸ユニオン

◇全国高校大阪府予選

○中地区予選

（4月29、5月1、3、5日）

＜男子＞

▽1回戦

阪南 18−16 藤井寺工
羽曳野 18−16 清風
東住吉 15−11 八尾東
教大附平野 11−10 花園
生野 19−16 勝山
八尾 12−9 山本
阿倍野 10−7 藤井寺

▽2回戦

桃山学院 33−11 阪南
大和川 15−14 羽曳野
東住吉 キケン 成器
上宮 26−9 教大附平野
天王寺 39−6 生野
池島 19−9 高津
八尾 17−9 住吉
此花学院 23−4 阿倍野

▽3回戦

桃山学院 23−18 大和川
上宮 24−12 東住吉
天王寺 24−9 池島
此花学院 30−7 八尾

▽準決勝

桃山学院 35−8 上宮
此花学院 16−7 天王寺

▽決勝

桃山学院 17−15 此花学院

＜女子＞

▽1回戦

八尾 21−8 東大阪
生野 22−5 高津
山本 没収 西浦
天王寺 17−5 八尾東

▽2回戦

城南 7−7 八尾
3 PTC 0

清友 10－8 樟蔭東
阪南 18－5 藤井寺
信愛女学院 9－7 生野
四天王寺 16－6 山本
大和川 34－2 池島
大谷 22－6 東住吉
鶴見商 20－0 天王寺

▽3回戦
城南 23－2 清友
阪南 9－8 信愛女学院
四天王寺 21－4 大和川
鶴見商 6－6 大谷（PTC 2－1）

▽準決勝
城南 7－4 阪南
鶴見商 6－6 四天王寺（PTC 2－0）

▽決勝
鶴見商 11－10 城南

○北地区予選（4月29、5月1、3、5、7日）

＜男子＞

▽1回戦
北淀 12－12 東淀川（PTC 3－1）
大阪学院 22－14 市岡
桜塚 24－3 扇町
東豊中 36－2 西淀川

▽2回戦
都工 14－9 北淀
追手門 16－11 吹田東
豊中 21－5 千里
大阪学院 21－16 大商
池田 14－12 桜塚
北野 19－19 豊島（PTC 1－0）
北陽 23－12 箕面
桜宮 21－14 東豊中

▽3回戦
都工 38－8 追手門
大阪学院 17－16 豊中
北野 没収 池田
桜宮 15－10 北陽

▽準決勝
都工 26－8 大阪学院
桜宮 23－9 北野

▽決勝
都工 19－8 桜宮

＜女子＞

▽1回戦
渋谷 14－11 福女
刀根山 11－4 金蘭会
豊中 8－3 市岡
成蹊 11－7 北野
桜塚 4－3 千野

▽2回戦
宣真 28－0 渋谷
刀根山 10－9 北淀
東豊中 19－3 扇町
豊中 11－5 桜宮
箕面 21－2 成蹊
薫英 19－6 東淀川
梅花 12－6 池田
豊島 13－4 桜塚

▽3回戦
宣真 18－4 刀根山
豊中 9－5 東豊中
箕面 13－13 薫英（PTC 1－0）
豊島 21－5 梅花

▽準決勝
宣真 16－6 豊中
箕面 10－6 豊島

▽決勝
宣真 8－8 箕面（PTC 3－1）

○南ブロック予選（4月29、5月1、3、5、7日）

＜男子＞

▽1回戦
登美丘 28－11 岸和田産
高石 11－11 岸和田（PTC 2－0）
泉陽 25－8 鳳
久米田 25－10 和泉工
住之江 12－0 堺西
商大堺 30－10 堺工
泉北 21－19 泉大津

▽2回戦
初芝 26－19 登美丘
高石 13－7 富田林
和泉 18－6 泉陽
堺東 39－8 久米田
三国丘 30－8 住之江
金岡 23－23 伯太（PTC 1－0）
商大堺 19－3 泉鳥取
貝塚南 13－12 泉北

▽3回戦
初芝 29－9 高石
堺東 18－16 和泉
三国丘 26－8 金岡
貝塚南 24－14 商大堺

▽準決勝
初芝 28－8 堺東
三国丘 10－8 貝塚南

▽決勝
初芝 18－5 三国丘

＜女子＞

▽1回戦
住学 27－1 岸和田

▽2回戦
泉北 8－4 住学
和泉 7－6 三国丘
高石 7－5 堺東
貝塚南 15－3 泉大津
東百舌鳥 20－16 泉鳥取
長野 15－12 久米田
岸和田産 13－2 貝塚
初芝 16－9 鳳

▽3回戦
泉北 15－3 和泉
貝塚南 8－4 高石
長野 16－10 東百舌鳥
初芝 15－8 岸和田産

▽準決勝
泉北 7－4 貝塚南
初芝 13－7 長野

▽決勝
泉北 9－8 初芝

○東地区予選（5月1、3、5、8、15日）

＜男子＞

▽1回戦
芥川 18－13 守口北
大東 28－8 関西大倉
四条畷 20－12 南寝屋川
淀川工 16－8 交野
同志社香里 11－7 門真南
浪商 26－13 加納
寝屋川 25－10 島本

三島 21－15 西寝屋川
長尾 26－20 茨木東

▽2回戦
摂津 23－14 芥川
大東 20－12 門真
淀川工 17－14 四条畷
同志社香里 18－8 茨木
浪商 17－13 枚方
寝屋川 34－17 牧野
三島 32－12 高槻北
春日丘 18－18 長尾
3 PTC 2

▽3回戦
摂津 24－8 大東
淀川工 16－12 同志社香里
浪商 23－17 寝屋川
春日丘 22－21 三島

▽準決勝
摂津 15－6 淀川工
春日丘 19－13 浪商

▽決勝
摂津 19－15 春日丘

＜女子＞

▽1回戦
大東 3－2 関西創価
南寝屋川 19－14 東寝屋川
春日丘 17－3 西寝屋川
茨木 5－3 長尾
寝屋川 18－5 高槻北
芥川 6－2 牧野
守口北 10－3 門真南

▽2回戦
摂津 11－3 大東
南寝屋川 12－6 門真
春日丘 20－0 茨木東
枚方 13－1 茨木
寝屋川 14－9 三島
大阪市立 15－4 交野
芥川 12－3 島本
香里丘 12－4 守口北

▽3回戦
摂津 16－9 南寝屋川
枚方 10－5 春日丘
寝屋川 12－5 大阪市立
香里丘 11－5 芥川

▽準決勝
摂津 10－3 枚方
香里丘 10－7 寝屋川

▽決勝
摂津 9－9 鳥居
3 PTC 2

○府中央大会

＜男子＞

▽1回戦
桃山 21－11 泉北
大商 19－17 春日丘
初芝 27－12 大阪学院
都島工 22－11 西寝屋川
天王寺 24－16 三国丘
摂津 25－13 上宮
桜宮 23－12 貝塚南

▽2回戦
桃山 20－15 大商
此花 19－12 初芝
都島工 22－11 天王寺
桜宮 16－12 摂津

▽決勝リーグ
桃山 14－14 此花
都島工 10－9 桜宮
桃山 17－15 都島工
此花 17－12 桜宮
桃山 21－9 桜宮
此花 17－11 都島工
〔順位〕①桃山学院②此花学院③都島工④桜宮

＜女子＞

▽1回戦
四天王寺 7－4 宣真
東百舌鳥 11－6 香里丘
摂津 12－7 長野
大谷 14－8 箕面
寝屋川 15－10 泉北
城南 13－11 豊島
鶴見商 18－4 金蘭会
初芝 11－6 枚方

▽2回戦
四天王寺 18－4 東百舌鳥
大谷 11－7 摂津
城南 16－12 寝屋川
鶴見商 16－12 初芝

▽決勝リーグ
四天王寺 12－4 大谷
鶴見商 6－5 城南
四天王寺 10－9 城南
大谷 7－5 鶴見商
四天王寺 7－7 鶴見商
大谷 10－7 城南
〔順位〕①四天王寺②大谷③鶴見商④城南

◇京都府高校選手権

＜男子＞

▽1回戦
京都商 24－15 洛北
伏見工 22－11 鴨沂
大谷 21－18 桂
堀川 21－7 同志社
城陽 25－19 塔南
洛陽工 23－17 田辺
乙訓 27－20 城南
洛東 12－0 日吉丘
西宇治 17－12 平安
洛水 25－20 桃山

▽2回戦
東山 24－12 京都商
大谷 27－15 伏見工
洛星 17－14 堀川
嵯峨野 17－15 城陽
向陽 23－16 洛陽工
乙訓 16－9 北嵯峨
西宇治 20－8 洛東
東宇治 36－8 洛水

▽準々決勝
東山 26－10 大谷
洛星 18－15 嵯峨野
向陽 13－9 乙訓
東宇治 29－3 西宇治

▽準決勝
東山 20－3 洛星
向陽 20－19 東宇治

▽決勝
東山 18（10－5、8－6）11 向陽

＜女子＞

▽1回戦
光華 18－8 鴨沂
西京商 9－4 久御山
洛水 12－0 桂
嵯峨野 13－7 京都商

西宇治 10—8 城南
東稜 14—6 洛北
精華 11—4 桃山
西山 8—3 北嵯峨
▽2回戦
東宇治 17—7 光華
西京商 16—5 城陽
京都女 9—6 洛水
乙訓 11—5 嵯峨野
明徳商 19—5 西宇治
東稜 19—7 塔南
精華 11—10 洛東
向陽 10—4 西山
▽準々決勝
東宇治 14—7 西京商
乙訓 9—6 京都女
東稜 14—9 明徳商
向陽 11—5 精華
▽準決勝
東宇治 18—7 乙訓
東稜 9—8 向陽
▽決勝
東宇治 20（9 11／7 1）8 東稜

◇第34回中国高校

（5月8、9日）

＜男子＞

▽1回戦
岩国工 30—7 呉港
松江南 24—13 米子西
江津 22—17 境港工
倉敷商 22—20 尾道
修道 24—23 倉敷青陵
岩国 26—9 境
倉敷工 26—8 米子東
下松 29—17 松江工
▽2回戦
岩国工 27—12 松江南
倉敷商 22—15 江津
岩国 32—14 修道
下松 29—13 倉敷工
▽準決勝
岩国工 19—6 倉敷商
岩国 16—13 下松
▽決勝
岩国工 27（16 11／10 11）21 岩国

＜女子＞

▽1回戦
山陽女 15—7 徳山商
温泉津分 14—5 米子東
総社 17—5 米子南商
進徳女 11—5 松江市女
徳山 13—11 比治山女
西大寺 7—6 境
倉敷天城 17—7 浜田商
▽2回戦
山陽女 24—7 温泉津分
進徳女 13—7 総社
徳山 19—8 西大寺
岩国商 29—5 倉敷天城
▽準決勝
山陽女 16—8 進徳女
岩国商 19—6 徳山
▽決勝
岩国商 13（6 7／3 7）10 山陽女

◇石川県一般春季選手権

（5月8、15日）

▽1回戦
県工ク 13—11 星稜ク
金沢工大 35—8 ロイヤルク
金沢大 30—12 寺井ク
IHC 18—12 松陵ク
羽咋ク 22—9 七尾ク
▽2回戦
金沢市役所 26—8 県工ク
金沢工大 20—17 金沢大
小松ク 37—11 IHC
あすなろク 12—0 羽咋ク
▽準決勝
金沢市役所 24—20 金沢工大
あすなろク 17—16 小松ク
▽決勝
金沢市役所 39（21 18／10 11）21 あすなろクラブ

◇関東高校茨城県予選

（5月12、13日）

＜男子＞

▽1回戦
水海道一 28—11 藤代
下館一 23—7 古河三
太田一 13—12 石岡一
八郷 19—8 麻生
笠間 22—6 緑岡
土浦一 24—10 岩井西
水戸一 14—12 勝田
岩井 22—14 土浦三
▽2回戦
水海道一 23—13 下館一
八郷 19—8 太田一
笠間 23—11 土浦一
岩井 29—15 水戸一
▽準決勝
水海道一 21—10 八郷
岩井 19—14 笠間
▽3位決定戦
笠間 17—12 八郷
▽決勝
岩井 24（13 11／9 5）14 水海道一

＜女子＞

▽1回戦
水海道二 15—5 日立二
土浦三 16—10 八郷
下妻二 14—3 友部
鉾田二 7—6 竜ケ崎一
麻生 12—9 太田二
結城二 16—7 石岡二
土浦二 15—5 岩井西
竜ケ崎二 10—5 潮来
▽2回戦
水海道二 20—4 土浦三
下妻二 12—0 鉾田二
麻生 18—15 結城二
竜ケ崎二 11—8 土浦二
▽準決勝
水海道二 18—0 下妻二
竜ケ崎二 8—7 麻生
▽3位決定戦
下妻二 13—12 麻生
▽決勝
水海道二 20（12 8／6 0）6 竜ケ崎二

◇第14回静岡県クラブ選手権

（5月15日）

＜男子＞

▽1回戦
清商ク 22—16 気賀ク
富士ク 15—14 静農ク
御殿場ク 19—7 沼津ク
二俣ク 40—5 常葉ク
▽準決勝
清商ク 19—14 富士ク
二俣ク 20—6 御殿場ク
▽決勝
二俣ク 16（9 7／7 7）14 清商ク

＜女子＞

▽1回戦
緑友会 11—7 清商ク
二俣ク 19—3 常葉ク
▽2回戦
ポストク 15—5 緑友会
二俣ク 9—8 城北ク
▽決勝
ポストク 25（11 14／2 4）6 二俣ク

◇第1回静岡県会長杯大会

（5月15日）

＜男子＞

▽決勝
元吉原中 10（5 5／6 3）9 雄踏中

＜女子＞

▽決勝リーグ

星美中 8（2－2 6－0）2 西益津中
静岡東中 26（12－1 14－1）2 西益津中
静岡東中 33（14－1 19－0）1 星美中

◇滋賀県春季社会人選手権

（5月22日）

＜男子＞

▽1回戦

京都セラミック 13－6 滋賀ハンダース
高島クラブ 14－9 長浜クラブ
浅井クラブ 21－8 大津自衛隊

▽2回戦

京都セラミック 15－13 高島クラブ
八幡工OB 21－16 浅井クラブ

▽準決勝

八幡工OB 18－13 京都セラミック

▽決勝

滋賀教員 20（10－8 10－5）13 八幡工OB

＜女子＞

▽1回戦

滋賀クラブB 21－7 滋賀大教育学部

▽決勝

滋賀クラブB 8（5－3 3－4）7 滋賀クラブA

◇昭和58年度中国四国学生春季リーグ入替戦

（6月19、26日）

島根大 22－21 広島工大
（2部1位） （1部5位）
松山商科大 24－18 徳島大
（3部1位） （2部5位）
※島根大、松山商科大が各々昇格

◇第19回北信越高校

（6月18、19日）

＜男子＞

▽1回戦

小松 20－16 高志
上田 25－7 柏崎
高岡向陵 24－19 屋代
八尾 32－17 柏崎工

▽2回戦

氷見 22－9 小松
上田 19－5 富山商
北陸 29－20 高岡向陵
小松工 34－24 八尾

▽準決勝

氷見 18（6－8 12－4）12 上田
小松工 23（11－7 12－12）19 北陸

▽決勝

氷見 21（10－11 11－6）17 小松工

＜女子＞

▽1回戦

福井商 15－5 新湊
佐久 16－11 有磯
高岡向陵 15－5 臼田
長岡大手 10－9 高岡女

▽2回戦

小松商 17－2 福井商
佐久 12－11 新潟江南
小松市女 23－7 高岡向陵
仁愛女 17－7 長岡大手

▽準決勝

小松商 21（7－8 14－4）12 佐久
小松市女 9（4－1 5－5）6 仁愛女

▽決勝

小松市女 11（3－4 8－3）11 小松商

◇第34回秋田県民大会

（7月2、3日）

＜成年男子＞

▽1回戦

VSOP 28－21 大曲ク
大曲農OB 39－35 平和自動車

▽準決勝

湯沢ク 50－29 秋田ハンドク
VSOP 28－21 大曲農OB

▽決勝

湯沢ク 52（24－12 28－9）21 大曲農OB

＜成年女子＞

▽決勝

全和洋 28（13－8 15－6）14 大曲スポーツ

＜少年男子＞

▽1回戦

大曲高 17－12 横手高
大曲農高 25－14 稲川分校

▽準決勝

湯沢高 17－10 大曲高
羽後高 17－14 大曲農高

▽決勝

湯沢高 30（13－1 17－8）9 羽後高

＜少年女子＞

▽1回戦

湯沢高 12－8 大曲高

▽準決勝

大曲農高 16－13 湯沢高
和洋女高 29－7 横手東高

▽決勝

和洋女高 20（11－3 9－4）7 大曲農高

昭和58年度 A級・B級 公認審判員審査結果

（A級）

受験者17名 合格者15名

半田忠、菅野肇（秋田）前川和三（滋賀）小西春夫（京都）奥田政俊、丸谷謙二（奈良）宮崎光市、倉本紘一、南波恒彦、新橋満（北海道）手塚寿郎（山梨）矢沢達司、横瀬藤雄（茨城）小川孝信（千葉）

（B級）

受験者33名 合格者32名

＜会場＞横浜市、京都市、大分市

高山重雄（秋田）田辺哲彦（青森）日原勝、佐藤博明（北海道）斎藤正寛、高田正憲（埼玉）笠原利宏、佐藤富男、内記英夫、五味崇恵（千葉）平野敬樹（神奈川）酒井伸夫（東京）倫井俊彦（山梨）辻吉和、田府勝、岩崎孝志（京都）溝口博一、飼沼敏雄（愛知）坂義則、浅沼敏雄、日比丈司、川合常雄（岐阜）佐藤喜一（大分）森山正治（福岡）阪本達也（熊本）高良政幸、屋嘉部辰也、新垣泰一郎、金城幸信、大城盛仁、比嘉和直（沖縄）真木崇（愛媛）

『ハンドボール』58年6月号（第221号）目次

第10回全日本自衛隊選手権大会

（6月28日〜30日・東京駒沢体育館）

〈男子の部〉

▽1回戦
厚木 28（15-9, 13-9）18 鹿屋

▽2回戦
北熊本 30（16-3, 14-10）13 補古 給 処河
久里浜 21（8-7, 13-7）14 東立川
一古 施 大河 28（16-8, 12-7）15 岩手
技三 養宿 所放 23（11-2, 12-4）6 旭川
青森 12（6-0, 6-0）0 神町
勝田 12（6-0, 6-0）0 習志野
下総 12（6-0, 6-0）0 岩国
呉 19（9-8, 10-6）14 厚木

▽3回戦
呉 31（16-4, 15-4）8 技川 養宿 所放
下総 17（7-5, 10-9）14 勝田
一古 施 大河 12（6-0, 6-0）0 青森
久里浜 18（8-10, 10-6）16 北熊本

▽準決勝
呉 23（10-4, 13-11）15 下総
久里浜 19（8-11, 11-7）18 一古 施 大河

▽決勝
呉 20（9-4, 11-8）12 久里浜

【呉】	得
GK 阪井	0
GK 須堯	0
FP 岩山	3
寿賀	3
塩見	0
岡田	2
池田	6
菊地	1
村岡	3
利光	0
岡部	2

【久里浜】	得
GK 西郷	0
GK 山口	0
FP 伊藤	0
洲鎌	0
白坂	0
友利	3
杉山	0
木塚	1
西岡	4
菅野	0
畑中	4

（審・小川・羽田）

20（1）PT（0）12

〈女子の部〉

看三 護 学 院宿 7（1-1, 6-5）6 中三 央 病 院宿

【看護】	得
GK 今給黎	0
FP 加藤	1
黒木	0
中崎	0
岩永	2
山下	2
香川	0
中川	0
大西	1
鶴田	1

【病院】	得
GK 垂水	0
GK 米沢	0
FP 戸塚	0
久保	3
土橋	2
尾前	1
小林	0
筒井	0
高橋	0
今	0
平礒	0

（審・冨永・小川）

7（0）PT（0）6

〈少年の部〉

少武 工 校山 22（13-5, 9-11）16 生江 徒田 部島
生江 徒田 部島 16（5-4, 11-4）8 生熊 徒 隊谷
少武 工 校山 22（12-10, 10-4）14 生熊 徒 隊谷

（優勝）武山少工校

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第二三一号
昭和四十年六月[illegible]日 第三種郵便物認可
昭和五八年七月二十五日 印刷
昭和五八年八月一日 発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表(467)七〇九七
振替 東京 六－五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
定価三百五拾円
(年間購読料 三千三百円)